

**** 2024年新年賀詞交歓会及び臨時総会・懇親会開催のお知らせ ****

2024年新年賀詞交歓会及び臨時総会・懇親会を下記要領で開催致します。皆さま、奮ってご参加下さい。

開催日 : 2024年 **1月18日**(木) 開会 **11:30AM ~ 13:30**
注) 会場は11:00AMから開けておきます。

会 場 : **双日株式会社本社・21階 大会議室**
東京都千代田区内幸町2-1-1 (飯野ビル内)
注) 会議室使用に際してのコロナ禍対応の制限はありません。

アクセス(メトロ) :
*千代田線・丸ノ内線・日比谷線「霞ヶ関」**出口C4方面**へ進み、
通路天井の案内板に従って、館内エスカレーターで **3階オフィスロビー** 迄。
*銀座線「虎ノ門」下車、**出口9**。飯野ビルまで徒歩5分程度。

会 費 : **無 料** (飲物、軽食を用意致します。)

服 装 : 軽装で御来場ください。マスク着用は自己判断。

特記事項

AAA 同封のハガキで **出欠** をご返事下さい。**締切12月20日(金)必着。**

BBB このビルはセキュリティ確保のため、**入館カード** が必要です。
3階ロビーの双日(株)受付付近で待機している社友会担当世話人に氏名を告げて、このカードを受け取った上、ゲートを入れて下さい。
ゲート出入りの要領は、SUICAやPASMOの使い方と全く同じです。
また、このカードは退館の時も必要です。それまでは必ず手元に保管下さい。

* その他、お問い合わせは、「世話人一覧表」記載の世話人か、または、社友会事務局にお寄せ下さい。FAXは03-6858-7216、Eメールはmenkwa@sojitz.comです。

2023年ニチメン東京社友会総会・懇親会における会長挨拶

会 長 石 原 啓 資



ただいま、ご紹介いただきました会長の石原でございます。

本日はお暑い中、かくも多数の会員皆様にご出席いただき誠に有難うございます。

三年半の長き間新型コロナ禍の影響で皆様とお会いできる機会を実行できず、残念な思いでしたが、本日皆様方と再会できたことは誠に喜ばしい限りです。

また、本日はお忙しい中、双日株式会社から平井副社長様をはじめ、多数のご来賓のご出席を賜り誠に有難うございます。心より御礼申し上げます。

ロシアのウクライナ侵攻はまだ終結には至っておりません。ロシア国防相に対するワグネルの反乱で終結に向かう何らかの糸口が見いだせるのかと期待しましたが、大きな情勢の変化は見受けられません。過去にソ連邦の領土であったとの理由だけで突然軍事力を使い侵略し、多くのウクライナ人を殺傷させる行為は絶対に許されることではありません。一日でも早くウクライナに平和な日が訪れることを祈っています。

インフレが欧米に訪れ日本も昨年から消費者物価が高騰しインフレ到来しています。資源、穀物等がロシアの侵攻もあり高騰し更に円安にて輸入物価が上がり日々の生活に苦勞しております。資源の価格も落ち着き値上がりも少しは落ち着くのかと思っていました。然し、今年の春闘で三十数年ぶりの賃上げが大企業で行われ中小にも賃上げが浸透しつつあり、継続的賃上げを実現するため原資確保を理由に商品の値上げが行われているとのコメントを耳にし本格的インフレが到来するのではと思っていますが、日銀は緩和政策を変更せず従来の方針を辿って行くとの総裁のお考えが最近披露されました。問題は来年の春闘で本年並みの賃上げが実行され継続的に経済の好循環が行われるか？見極めが必要かとのコメントを仰る経済評論家がいらっしゃいました。来年7月頃に程良いインフレ経済になれるか見極めが必要のようです。

いにしえから、インフレになれば商社は儲かるとの諺があります。第一次オイルショックの際に空前の利益を生み出したこと記憶の片隅に残っています。今期、双日含め大手商社全てで空前の純利益を稼ぎ出し最高利益を更新しています。アメリカの投資会社も大手商社株を買い増しし日本への投資を増やしております。ロシアのウクライナ侵攻が終結すれば、日本が中心になりウクライナ復興事業が行われること間違いのないと思います。商社にとって大きな商機はあると信じています。双日も十分な果実を収穫されること信じて疑いません。更なる利益の上乗せを期待しています。

経済の構造的変化も見え隠れしています。労働人口が減少し人手不足が深刻になるとの予測が語られていますが、毎年出生数が過去最低を辿っており、大幅に移民を増やさぬ限り人口は

減って行くのは当然です。いくら人生100年時代と煽られても、人間の生命には限界があります。残念ながらこの三年半の間に多くの会員を失っています。経済を成長させるためには労働力不足を克服することが不可欠でしょう。今まで人間がやっていたことでIT技術に任せられることは任せ、やっと賃金が上がる可能性を感じられる時代になったので、効率性を追求し自らの質を上げ新たな分野に挑戦する実効性が認められる社会になるのではと思っています。

後ほどの総会にて昨年度の収支報告、本年度の収支予算を諮らせていただきますが、会員数の減少にて年々会費収入が減ってきております。会の継続性を担保するためにも、ご出席の会員の皆様におかれましては、新規会員の勧誘にお力をお貸しいただきたくお願い申し上げます。

本日は三年半振りの懇親会となり、会員皆様方に於かれては積もり積もったお話もあろうかと推察し、一切の余興を無くし出席者皆様方の懇親に集中させていただきます。感染防止に留意し親睦を温めてこの一時を楽しんでいただければ世話人一同嬉しい限りです。

この暑い夏をお元気でお過ごしされることお祈りし私のご挨拶とさせていただきます。

この場で皆さん方にご披露したい件がございます。先般、双日株式会社藤本社長様から弊員宛てにお手紙を頂戴いたしました。ここで皆様にご披露させていただきます。(次頁参照)

このようなお手紙を頂き、我々世話人一同全員で色々なことを考えました。現状を鑑み、また近い将来を鑑みますと、会員的大幅な減少、会費の徴収がどんどん減ってきていることから、今回の藤本社長様のご要望について前向きに検討するべきではないかというふうに思っております。皆様方には寂しい思いをさせることとなりますが、何卒ご理解を頂いて2024年の社友会の統合という方向に進めていきたいと考えております。唐突な話で皆様も戸惑われていると思いますが、事情を勘案して頂きまして、現社友会と致しましては双日株式会社のご意向に沿って頂きたいという方向について皆様方のご賛同を頂きたいというふうに思っております。ご賛同頂ける方は拍手でお答えいただけると有難いと思っております。(会員多数より拍手)以上、私からの挨拶と双日株式会社藤本社長様のご要望をお伝えしました。どうも有難うございました。



ニチメン東京社友会 石原会長殿

拝啓

時下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

社友会の皆様にはいつも双日を温かく見守っていただき、感謝致しております。

お陰様で、この度2022年度決算において、過去最高益となる当期利益1,100億円を達成することができました。これもひとえに、諸先輩方が優良な商権や資産等の礎を築いて頂いたおかげと感謝いたしております。

2004年に双日株式会社が発足してから、2024年にちょうど20周年を迎えます。会社は統合してから時間が経過しましたが、社友会は現在も、日商岩井社友会、ニチメン東京社友会、ニチメン大阪社友会、双日社友会の4社友会が、それぞれ独自にご活動されております。一方、会員の減少や高齢化などの問題もあるとの認識です。

今後、2004年以降に双日に在席していた社員については、会社生活の大半を送っていただいたこともあり、双日社友会に入らせていただくのが自然で、上記の会員の減少や高齢化の解消には繋がらないものと思われまふ。そこで、両社統合から20年という節目に向かって、社友会の統合をご提案させていただきたいと考えております。

まずは、2024年中の統合を目標に定期的なお話し合いを開始させていただければと思います。個別の同好会の特徴や文化を尊重しながら、一つの組織としての統一感を育む方法について考えていきたいと考えております。

何卒、ご理解とご協力の程、よろしく願いいたします。

敬具

令和5年7月4日

双日株式会社

代表取締役社長 藤本昌義



藤本社長様からのお手紙

2023年度ニチメン東京社友会総会・懇親会 来賓ご挨拶

双日株式会社 代表取締役副社長 平 井 龍太郎



ご紹介を賜りました、営業管掌で副社長の平井でございます。本日はニチメン東京社友会の総会・懇親会にお招きいただき誠に有難うございます。

2020年以来、3年半振りの東京での開催ということで、諸先輩方の元気な顔を拝見することが出来、心から嬉しく思う次第でございます。

さて、双日は6月20日に株主総会を行い、2022年度の決算は過去最高となる当期純利益1,112億円を記録しました。株価も3,000円台と好調に推移しており、これもひとえに、本日ご臨席頂いている皆様をはじめとした諸先輩方が、たくさんの商権やネットワークといった優良な資産の礎を築いて頂いたおかげであり、過去の皆さまのご尽力に対し、心より御礼申し上げる次第です。

双日が2004年に発足してからはや20年が経過し、節目の年を迎えます。

1,000億円を発射台として今後も更なる発展を続けるべく、次の成長ステージへ歩みを進めていく必要がございます。株価の方はマクロの経済情勢など、我々自身がコントロールできない部分も多くございますが、4,000円、5,000円と更なる高みを目指してまいります。その実現のためには、自分達が世に公表する計画をきちんと達成していく、その確実性と共に将来に向けた打ち手、投資家の皆さんの期待感を得られるプロジェクトの進捗が鍵であると認識しております。

会長のお話しにもございましたウクライナの復興については、既に自動車本部で特殊車両等を受注しており、商社の中でも先行した動きをみせております。また脱炭素の社会に向けて、水素やアンモニアのPJも現在、取組みを進めている所です。

今後、20年、50年、100年と続く会社とするべく、役職員一同全力を尽くしてまいりますので、引き続き、温かい心でご支援をいただけましたら幸いです。先ほどの石原会長のお話しにございましたが、双日発足後、20年の節目におきまして、社友会の在り方についての見直しを行うべきタイミングではないかと考え、各社友会の代表に対して、4つの社友会の統合について、ご相談を申し上げている状況です。今後、皆様方のご意見やご提案も伺い、個別組織の特徴や文化を尊重しながら、一つの組織としての統一感を育む方法について共に考えて参る所存ですので、皆様のご理解、ご協力をお願い申し上げます。

ここで、本日出席しております当社役員のご紹介を申し上げます。

常務執行役員でJALUX 代表取締役社長の高濱悟、人事担当本部長の橋本政和、執行役員で化学本部長の岡村太郎、秘書部長の畑田秀夫、元専務で現顧問の田中勤 以上でございます。

結びに本日ご臨席のニチメン東京社友会の皆さまが、健康で毎日楽しく過ごされますこと、特にこれから暑い暑い夏を迎えます。どうかご自愛賜りますよう、心より祈念致しまして、ご挨拶とさせていただきます。ご静聴、有難うございました。

2023年ニチメン東京社友会「第18回総会・懇親会」開催報告

広報チーム

2023年7月13日（木）双日㈱本社21階大会議室をお借りし開催。

猛暑の中、今回も多くのお客様、双日株式会社様からのご来賓を含め90名（別掲出席者一覧）のご出席を頂きました。

11時に開場、11時30分の開会宣言で始まり、当会石原会長の挨拶、引き続き来賓代表として双日株式会社代表取締役副社長平井龍太郎様から挨拶いただきました。

⇒詳細は別ページに掲載しております。

総会議事：

- ① 総会議長選出
 - ② 物故者への黙祷
 - ③ 2022年度事業報告・決算報告（別掲載資料）…………… 世話人 榊山 俊次
 - ④ ③に関わる監査報告…………… 監 事 大羽陽一郎
 - ⑤ 2023年度事業計画案・予算案（別掲載資料）…………… 榊山 俊次
- 上記③④⑤は、議長の一括承認要請に応え、満場一致で承認されました。

懇 親 会：

今回の総会は新型コロナ禍により開催が4年の間延期となったこともあり、参集された大勢の会員が久々に談笑出来る場となりました。12時開会、中川十郎様の“乾杯”のご発声と皆様のご唱和により、会場は一気に賑やかに、テーブル一杯のお料理を求め歩く方、飲み物を探す方、話し相手を求める方など活発な動きが見られ、あちこちで笑い声、賑やかな輪ができあがり、皆さんがお互いの無事息災を確認され、次回の再会を約しておられました。



乾杯の音頭挨拶文

中 川 十 郎



この度は久しぶりにニチメン社友の皆様が、コロナ禍にも関わらず元気に一堂に会し、再会できたことをうれしく思います。

かつてニチメンに勤務し、同じ釜の飯を食したニチメンの同志と面談しますと、若いころ皆様がニチメンの国内外でご活躍されたころを懐かしく思い出し、元気が湧いてまいります。

先ほどの平井双日副社長、ニチメン東京社友会 石原会長のお話によると、合併20年を経て2024年4月にニチメン社友会と日商社友会が双日社友会に合併し、今後合同で社友会が開催されることになるようです。そうなりますと、今回のニチメン社友会は最後になるかも知れません。本日ご出席の社友の皆様、大いに懇談され、親善をさらに深められますよう希望いたします。

皆様、今後とも健康に留意され、来年もニチメン同志の皆様と元気で目にかかれますことを祈念して乾杯いたします。乾杯！



◎2023年 ニチメン東京社友会総会

2023.07.13 開催

(50音順、敬称略)

(一般会員)

ア 青 木 政 和
東 信 子
荒 木 武 雄
池 永 浩
五 十 畑 利 枝
伊 藤 安 雄
上 田 吉 彦
越 智 栄 史
太 田 弘 之
大 谷 和 夫
大 場 禎 治
大 平 栗 雄
岡 島 岩 男
岡 田 茂
小 川 桂
小 田 隆 彦
力 勝 田 泰 司
鏑 木 順 治 郎
蒲 澤 信 男
川 西 正 勲
川 畑 正 己
北 野 秀 明
木 寺 厚 二
久 世 清 司
小 齋 西 重 勝
サ 月 女 造
五 原 穰
笹 藤 弘
佐 塚 由 紀
篠 塚 美 恵
洪 谷 和 郷
清 水 武 雄
杉 浦 俊 人
須 藤 昭
陶 山 晃

タ 高 見 恒 博
竹 内 可 能
武 田 尚 憲
田 所 忠 彦
津 田 賢 一 郎
富 岡 矩 子
富 田 仁 郎
ナ 中 川 十 郎
中 原 正 紀
中 島 一 郎
南 部 捷 郎
西 村 照 男
ハ 橋 口 喜 郎
蓮 沼 恒 郎
長 谷 川 尚
浜 地 道 雄
樋 口 龍 彦
久 本 紘 一
平 井 清 文
廣 本 富 昌 也
福 本 富 田 直 明
マ 本 牧 登 志 務
栴 松 洋 生
ヤ 矢 山 一 夫
山 口 邑 孝
山 邑 光
山 邑 一

(社友会役員・世話人)

石 原 啓 資
新 藤 孝
青 木 聡 弥
入 江 隆 史
大 羽 陽 一 郎
北 川 幸 雄
木 津 奈 緒 子
近 藤 厚 子
丹 下 薫
中 田 龍 彦
蛭 田 恒 美
栴 山 俊 次
森 田 淑 子

(会員) 支援者

石 黒 由 紀 子
滑 川 和 子
堀 典 代
山 本 幸 江

(ご来賓その他)

平 井 龍 太 郎
高 濱 悟
橋 本 政 和
岡 村 太 郎
畑 田 秀 夫
田 中 勤
小 倉 根 茂
関 田 大 淳
岡 田 大 輔

①一般会員 68名
②世話人等 13名
③双日ご来賓 9名
出席者数合計 90名

2023年総会・懇親会風景



2023年総会・懇親会風景



2023年総会・懇親会風景



2023年総会・懇親会風景



2023年総会・懇親会風景



2022年度事業報告 及び 収支報告

(期間：2022年7月1日～2023年6月30日)

ニチメン東京社友会

I. 事業報告

	実績	千円 予算
第17回 総会・懇親会開催 (中止)	44	0
会報の発行	654	800
会報32号 2022年8月8日発行		
会報33号 2022年12月8日発行		
ホームページの運用	231	200
第16回 新年会開催 (中止)	111	700
慶弔行事	795	1,000

II. 収支報告

A) 収入の部

1. 会費	960	1,000
2. 双日助成金	2,500	2,500
3. 寄付	158	0
4. その他	17	0
合 計	3,635	3,500

B) 支出の部

1. 総会開催	44	0
2. 新年会開催	111	700
3. 会報・会員名簿の作成	654	800
4. ホームページの運用	231	200
5. 会員慶弔	795	1,000
6. 世話人会の運営経費	42	300
7. 事務所運営経費	792	850
8. 予備費+雑費	0	50
合 計	2,669	3,900

C) 繰越金及び預り金の部

当期収支残高	966	-400
前期繰越金	3,848	2,836
当期末繰越金残高	4,814	2,436

(預り金)

次年度以降年会費等	705	
双日次年度助成金	625	
預り金残高	1,330	
合 計	6,144	

2023年度事業計画 及び 収支予算

(期間：2023年7月1日～2024年6月30日)

ニチメン東京社友会

I. 事業計画

	千円	
	予算	前期実績
第18回 総会・懇親会開催	850	44
会報の発行 (年二回 会報を作成し送付いたします。)	700	654
ホームページの運用	250	231
第16回 新年会開催 (2024年1月 予定)	850	111
慶弔行事	1,000	795

II. 収支予算

A) 収入の部

1. 会費	1,000	960
2. 双日助成金	2,500	2,500
3. 寄付	0	158
4. その他	0	17
合 計	3,500	3,635

B) 支出の部

1. 総会開催	850	44
2. 新年会開催	850	111
3. 会報の作成	700	654
4. ホームページの運用	250	231
5. 会員慶弔	1,000	795
6. 世話人会の運営経費	300	42
7. 事務所運営経費	850	792
8. 予備費+雑費	50	0
合 計	4,850	2,669

C) 繰越金及び預り金の部

当期収支残高	-1,350	966
前期繰越金	4,814	3,848
当期末繰越金残高	3,464	4,814
次年度以降年会費等	0	705
双日次年度助成金	0	625
預り金残高	0	1,330
合 計	3,464	6,144

◎ 会 員 動 向

新規加入者（敬称略）

萩野恭司、紅林哲夫、川崎一彦、熊谷正二、左東敏明、荒井玲子、寺川敏郎、篠崎光宏

退会者（敬称略）

該当なし

資格喪失者（敬称略）（会則11条3項により、会費を2年間以上未払の場合が該当いたします。）

阿久津佳子、芹生宏、前田征雄、松浦淳、森江健児

連絡が途絶えている方（敬称略）

（連絡先をご存知の方は、事務局までお知らせ願います。）

石川勝美

新入会員募集中

皆様の周りで未加入の方がいらっしゃいましたら是非勧誘いただきたく思います。

本会の会則に同意して、会費を納入頂けるなら会員になれます。

（ニチメン、ニチメンの関連会社に在職したことのある方が対象になります。）

◎ 2022年度(2022年7月～2023年6月)年会費(3千円)入金状況とお願い

2023年09月30日現在

会員数	入金済会員	長寿会員(註1,2)	終身会員	未納会員
386	241	78	12	55

** 2021年度分未納者数 ** 2

尚、来年度（2024年7月～2025年6月）年会費 納入済の方→ 23 （註4）

お願い：

2022年度会費を未納付の方は当年度会費と合わせ至急の納付にご協力下さい。

2021年度分未納者は資格喪失となります。大至急21, 22年度分と合わせて納付頂くようお願い致します。

当会会則第11条の規定により2期分の会費未納者は会員資格喪失となります。

振込先は、下記いずれかを利用して下さい。（振込手数料は各自ご負担願います。）

1) 郵貯銀行

口座番号 : 00100 - 4 - 318041

口座名義 : ニチメン東京社友会

2) 三菱UFJ銀行 東京営業部

普通口座

口座番号 : 8225155

口座名義 : ニチメン東京社友会 代表 石原啓資

振込に際しましては、振込者名欄にご自身の名前を最初に左詰めにて記載願います。

(ネンカイヒ、ニチメン、XXネンドカイヒ等の記載があると振込者名が通帳に記載されず、振込者が特定できません。)

(註1) 長寿会員は年会費免除になっておりますが、長寿会員からご送金を頂いた場合は当会へのご寄付とみなし処理させていただきます。(会運営上大変助かります)

但し、何らかの手違い等であれば事務所までご連絡下さい。

(註2) 長寿者氏名：(50音順 敬称略)：

青木繁行、阿賀信夫、石川勝美、石原靖造、泉伸夫、伊藤安雄、入野英次、岩居宏一、宇治田薫、海野敏夫、大久保海生、大谷毅丈夫、大塚静子、大村善勇、大森啓作、岡島岩男、沖田隆彦、河西良治、勝田泰司、川畑正巳、北川嘉雄、喜多島雄徳、倉又則夫、栗田久彌、黒木俊二郎、近藤貞一、斎富造、坂井良司、桜井潤一、三分一克美、柴田実、島田俊彦、菅沼利太郎、菅谷省三、高瀬裕、高瀬允宏、高田秀子、田尻眞啓、伊達邦雄、津田賢一郎、永井清光、中川十郎、中原正紀、西奥董尚、西川洋、西田昇、庭野松三、野城恒男、芳賀信明、橋爪覚、長谷川洋、林義人、平岡昭三、廣瀬一彦、廣田雄太郎、深尾孝、福富直明、堀田恒雄、本田務、牧洋生、松田邦夫、松田實、松村信男、松本寿夫、三浦甲蔵、水庫博夫、宮内義彦、三宅葉、村井靖武、村上匡一、本松巖、矢島孝、八津道夫、山岸正雄、山本昌裕、吉田孝生、吉野昭一、吉本邦晴、以上 78名

(註3) 終身会員 (50音順 敬称略)

入江隆史、岩田功、大羽陽一郎、奥村陸夫、唐崎和彦、木寺厚二、新藤孝、千田俊章、土橋昭夫、中田龍彦、古澤陽一 (2024年度から)、榊山俊次、宮本正博 以上13名

(註4) 2024年度(2024.7～2025.6) 年会費納入済会員 (50音順敬称略)：

<<来年度は、振込不要になります。再来年に、25年度分の振込をお願いいたします。>>
浅子豊治、東信子、石原啓資、伊藤尚志、今井明、岡田茂、小野宗一、坂井辰雄、高橋正、田上佳作、田中弘、谷昌興、土屋秀雄、滑川和子、野本定男、服部輝夫、浜地道雄、松村森男、丸野純、水野英幸、宮尾迪子、安井修司、山口一光、以上 23名

(註5) 2023年5月以降で寄付をいただいた方々

三浦甲蔵、河西良治、野城恒男、津田賢一郎、林義人、中原正紀、高瀬允宏、高瀬裕、岩井宏一、八津道夫、松村信男、石原靖造、倉又則夫、三分一克美、牧洋生、本松巖、沖田隆彦、西川洋、庭野松三、矢島孝

2024年 新年会にて 長寿者お祝い対象者(敬称略)

白寿 (1926年生まれ)

該当者なし

米寿 (1937年生まれ) 24名

赤澤宏哉、今井明、大北克利、尾上鏝一、金田正博、五島慎二、篠塚美郷、白坂泰之、陣内義夫、竹内可能、豊木啓喜、西村昭男、林正弘、半林亨、平井出良彦、福島有恒、前田孝、松岡秀樹、松野弘、水野隆二、宮本正博、山邑陽一、吉川浩、吉木健

なお、大変恐縮ですが対象者の名前に漏れ等不手際があれば至急世話人へ連絡願います。



頌 寿
皇 寿
茶 寿
紀 寿
白 寿
率 寿

米 寿
傘 寿
喜 寿
古 希
還 暦

会員寄稿文

中世ヨーロッパに於ける歴史的な女傑の物語
——アリエノール・ダキテーヌのこと——

竹 内 可 能

いつものことながらわたしの歴史物語といえば、これはいつもの如く古代ローマ帝国についてのものか、或いは西洋の中世史に関わるものだ。そんななか何かの拍子で読んださる有名な国際調査機関による報告で、日本における女性の地位や権利が先進諸国のなかでも異常に低いことが判明しているという。それによると何でもその調査対象国として全世界140数か国中、ビリから数えた方が手っ取り早いという記事だった。

咄嗟にわたしはそれはないよと心では思いつつも、政治の世界の閣僚数とか一般企業の要職の数からだけ考えれば、わが国の女性の立場は著しく弱いことは明白である。しかしこの男女格差はもう少し総合的な判断が必要であり、日本の女性がこの調査団に指摘されるほど酷い状態だとは思わないのである。

そうした議論はさて置くとしても、先日観戦した今年女子サッカーW杯で偶々日本の対戦国となったノルウェイやスウェーデンのチームの女性群の顔立ちをみて、ひとしきり感心したことがある。それは日本の女子選手たちの子供こどもした、かわいらしい顔立ちに比べてあちらの選手たちのそれと云ったら、なかなかの獷猛という他はない。私はその昔9世紀から10世紀にかけて欧州に災いをもたらし続けた、あの恐るべきノルマン禍のことを思い出していたのだ。ノルマン禍と黒死病とこの二つの災いは、ヨーロッパ中世という時代に襲い罹った、ひとつは人間による、ひとつは自然による極めつきの二大災害であったことを忘れてはならない。

こうした男女格差がきっかけだとは言わないが、本号ではヨーロッパ中世史の中で誰かひとり最も有名な女傑はと問われれば、私は直ちにあの「アリエノール・ダキテーヌ」だと答えたい。彼女は今でいう英国とフランスを股にかけて、その両国の王を手玉に取りながら両方の妃にまで駆け上がった女人である。彼女が生まれたのは西暦1122年だから、その当時はどこであれ数多く割拠した封建領主が権力の主体だったことは当然として、国家とか国民といった意識は希薄だった。英仏海峡が隔ててはいたが両国にもまだ国家意識が目覚めてはいなかった時代といえる。

そのアリエノールが生まれたのは今でいうフランスの南西部アキテーヌ地方、中世のアキテーヌ侯領である。この時代この地に彼女が生まれたこと自体が、その後の彼女の行く末にどれほど重大な影響を及ぼしたのか、それをまず見て行こう。

ご承知のように古代のローマ帝国が消滅したあと、東北ガリアの地にフランク王朝が起こった。そして10世紀ごろ西フランク王国の家系が断絶するとカペー王朝が起こる。アリエノールが生まれたのは丁度この頃であった。このフランス南西部地方といえば、それまで見たことも聞いたこともないような一大文化革命と云ってもよいような事変が起きていたのだ。それは云ってみれば大多数の封建領主貴族たちによって支えられた詩歌革命であり、ヨーロッパ叙情詩の発見ともいえた。

こうした抒情詩の発見を促すことになったのは、フランス語の形成過程で南フラン

スが北フランスと分離してオック語圏をつくったことと関連している。つまりリムーザン、ペリゴール、アキテーヌ、ガスコニュ、そして地中海一帯、ローヌ川中流以南、オーヴェルニュ山地である。フランス語で肯定辞を北部ではオイルというのに対して、南部ではオックというのだそう。このオック語圏に抒情詩が成立したのだ。

少しながながとオック語圏の話に及んだのにはわけがある。このオック語圏が生んだ最古、最大の詩人がなんとアリエノールの祖父であるギョーム9世、つまりはこのアキテーヌ侯ギョーム9世最愛の孫娘がアリエノールであった。このオック語圏の詩人のことを「トルバドール」(これもラテン語からの派生語で「歌作り」を意味するらしい)と云って今では懐かしい言葉である。「中世ヨーロッパの歴史」の著者堀越孝一に因んで、アキテーヌ侯ギョーム9世の歌と称される「後朝(きぬぎぬ)の歌)のはしりを下記にしておきたい。

たとうれば、われらが恋は、
 山査子(さんざし)の枝にも似て、
 木にうちふるえ、
 夜雨にうたれ、霧にぬれて、
 緑の葉、小枝の茂みに、
 朝の陽光(ひ)にひろがるがまで、

堀越はさらにつづけて「木陰の館の歌会」という小見出しのもとに書いている。美しい表現なのでそのまま引用させてもらおう。「スペインからピレネー山脈の南の峠を越えて、トゥールーズに出、ガロンヌの流れに沿って下り、ボルドーからドルドーニュの流れを渡って北に向かう旅行者は、アキテーヌのかぎりなくやさしい風土に深く印象づけられるにちがいない。この土地は、その名の由来どおり、水の土地である。大気が甘く煙っている。そういう風土に根付いていた詩形式であった」と。繰り返しになるがこうした詩形式なりトルバドールの

存在が、当時の特権的な領主貴族社会によって占められていたことは、重ねがさね注目に値する事実ではあった。

アリエノールが取るものも取り合えぬようにして、ルイ7世と結婚したのは確か15歳のときだった。彼女は云われるように彼女自身の妖艶さに加えて、以上に述べてきたような絢爛豪華な詩歌を中心とした宮廷文化の華でもあった。それに比べればカペー王朝文化の北の遅れはたださえ指摘されよう上に、ルイ7世自身の性格からして僧侶の地味さ加減が加わる。彼女の傲慢ともいえる自由奔放さも、一時はルイ7世をわがものとした時期もあったようだが、最後には決裂した。二人の間には後継者としての男児が生まれなかったことも禍だったことだろう。

しかし彼女は離婚に至ると言えども一歩たりとも怯むことはなかった。それどころか彼女が英国王ヘンリー2世のもとに飛び込んだのは、ルイ7世との離婚騒ぎのほとぼりも冷めやらぬ時期だったことは、彼女の妖艶もまだ衰えをしらず、何よりも彼女自身が自信満々だったからである。こうした彼女の自信を支えたものには、今書き込んでいるような南西フランスに於けるトルバドールを中心とした、詩的な絢爛豪華のうちにあった宮廷文化が第一に挙げられるだろう。しかし、この時期もう一つの宮廷文化の発展に貢献した、「愛の臣従」とも言われる貴婦人層に対する崇拜作法についても触れておかねばならない。

これは当時群雄割拠していた領主貴族層同士が、お互いに「臣従礼」を行使して、領主間の争いごとを回避するかなり有力な手段だったはずだが、これをまねた貴婦人崇拜のための宮廷礼節の理念だったと云える。つまり殿方は「御方」と称する貴婦人に向かって「指輪」を差し出し、御方は愛を受け入れるのである。これは上述の領主間の「臣従礼」の儀式における封の授受に

おいても、「指輪」は封と考えられていたというから、まちがいはなからう。

この有名な当時の「臣従礼」について大変面白い事例が記憶にあるので、ここに紹介しておきたい。ご承知のように王位断絶を前にして10世紀の西フランクは、件のノルマン禍にさんざん悩まされた挙句、結局このノルマン族との間に「臣従」の関係を成立させた。そしてノルマン族はこの臣従礼のもとに、ノルマンディー侯領を封土として認められたのだ。セーヌ河の下流から西はブルターニュの境界に至るまでの封土であった。往時のノルマン禍の一大成功例として、さらにはこの地のことは第2次世界大戦時のアメリカ軍による上陸作戦とともに、長く記憶にとどめ置かねばならないだろう。

さて、こうして仏国王から英国王ヘンリー2世に乗り換えることになったアリエノールは、結局王との間に4人の男児と二人の女兒を授かった。男児のうち上の二人は夭折したが後の二人は英国王となる。名にし負うリチャード獅子心王と次のジョン欠失王とであった。リチャードが終生アリエノール最愛の息子だったのにくらべ、夫のヘンリー2世にとっては、末子のジョンが目に入れても痛くはない存在だった。いずれにしろ英国王にとっては、どれもこれも息子たちには大変手を焼くなど、やっかいな存在だったことは事実であったという。

上述のように再婚時も傲慢無比といわれたアリエノールだが、夫のヘンリー2世にも確かな読みはあったとされる。その最大のメリットは、彼女にはいつも特有の色仕掛けがあったことだろうが、何にもまして彼女が持ってくる婚資としてのアキテーヌ侯領である。ヘンリー2世がこれを領することは何物にも代えがたい魅力であった。第2には上述の婚資としてのアキテーヌ侯領には、お隣のトゥールーズ伯に対する上級領主権が含まれていたこと、第3にはノル

マンディー侯の領主としては当然のことながら、西隣のブルターニュ侯の領主に対しても上級領主権を行使できたことであった。こうして英国王ヘンリー2世こそは、居ながらにしてフランス西部の大部分を総括する大王になれるのである。

そういうヘンリー2世の出自にも触れておかねばならない。それを言い出す前に大陸のアンジュー王国（プランタジネット王国ともいう）に触れる必要がある。この家門はカペー家の国王選挙に加担した諸侯伯に名をつらねた名家で、本来の家領アンジューに加え、後述のジョフロワの母の血縁からメーヌを、隣国のプロア伯に臣従礼をたててトゥーレーヌを領していた。その当主ジョフロワは（ジョフロワ・プランタジネットと呼ばれていた）ノルマンディー侯だったが、その妻にイングランド王ヘンリー1世（ウイリアム征服王の第3子）の娘マティルダを迎えていた。

このノルマンディー侯ジョフロワ夫妻に生まれたヘンリーこそ、紆余曲折をへたのち、後の英国王ヘンリー2世その人とであった。アリエノールが再婚を果たした相手がこの男だったのである。この二人の間の子供たち、先述のリチャードもジョンも、自分たちの本当の出自はアンジューであることを、二人とも英国王となってからも終生忘れようとしなかったと云はれるのは、このことだったのだろう。

この二人の子供たちの物語こそ直接英国の誕生につながるものだから、話は長くなってしまっているのでこのへんで打ち切りをしたい。但しジョン王については自ら招くことになるいくつかの失敗の後、英国王としてきっぱりと大陸の仏領とは縁を切る羽目に立ち至ったからには、そのきっかけになった「ブーヴィーズの敗戦」と「マグナ・カルタ（大憲章）」だけは注目しておきたい。とりわけ大憲章ではジョン王が並み居る英国諸侯の圧力に屈して、諸侯の立場の尊重を約束させられた大事件であった。1215年

のことである。

英国王ヘンリー2世に嫁いでからのアリエノールの人生といえば、一口で申せばこれはもう波乱万丈という他はない。当初は仲睦まじかったとされる夫婦間の愛も絶え絶えとなり、挙句の果ては、子供たちが揃いもそろって夫ヘンリー2世にたてつくのは、アリエノールの陰謀だとして夫は彼女を軟禁するなどに及んだ。その一方で彼女はまた「ヨーロッパの祖母」などとはやし立てられてきたのも事実である。つまり後のハプスブルグ家よろしく婚姻関係を通じて、わが子リチャード獅子心王を始めとして自分の子供たちを、ヨーロッパ各地の貴族層たちの間にひろめることも怠らなかった。映画「冬のライオン」などもし見る機会があればお勧めしたい。

以上に述べてきたようなアリエノール・ダキテーヌの物語だが、考えてみると多分に12世紀の政治的または文化的な側面ばかりの記述が多くなってしまったような気がする。本当なら彼女の本質はより個人的なともいふべき、自由奔放で勝手気ままな生

き方のなかにこそ見だされようかと思われる。わたしがここで強調したかったのは、彼女の豪放磊落ともいえる性格が、あのトルバドールの代表格ともいえるアキテーヌ侯ギョーム9世の最愛の孫娘であったことと、その孫娘が当時の世界に冠たる宮廷文化の華だったことによって強く裏打ちされていることである。

もう一つ付け加えるとすれば、これも申し上げた通り彼女が生まれ育った12世紀は、ヨーロッパの政治の世界では何といても群雄割拠の領主貴族層が権力の中枢だったことである。そうした特権階級の領主貴族層には有効な政治的手段として多用した「臣従礼」があり、同時にアリエノールも多用したはずの、男女間には宮廷作法としての「愛の臣従」があった。時代を経るに従いこうした領主貴族層はだんだん没落を余儀なされ、代わりに台頭してきたのはれっきとした国家・国民意識である。アリエノールの息子ジョンのことは先に触れたが、彼が英国王の時代ブーヴィーヌの敗戦以来、彼はきっぱりと大陸に横たわる仏領とは縁を切った。こうした動きもまた国家・国民意識の高まりとともにあったのだろう。



会員寄稿文

ミステリ小説断想(17)

福 富 直 明

日記を素材に使ったミステリ小説が何作もある。概して好評の作品が多く、古くはサムエル・ドオーゼの『スマイル博士の日記』(1917)、戸川昌子の『獵人日記』(1963)、ギリアン・フリンの『ゴーン・ガール』(2012)、近作ではアリス・フィーニーの『彼は彼女の顔が見えない』(2021)など、日記の記述に同情しながら読んでみると、後半でどんでん返しを食らう。日記の中にトリックが、つまり読者への挑戦が仕込まれていることが多い。

それはさておき、西條八十の直筆の日記を読む機会があった。日記を読解するのはミステリ小説を読むのとよく似た脳の作業だった。

西條八十と言えば、昔の流行歌の作詞家として知られていると思う。「唄を忘れた金絲雀は…」「青い山脈」「花も嵐も踏み越えて…」「誰か故郷を想はざる」「吹けば飛ぶよな将棋の駒に…」「トンコ節」など、さらに戦時中の「若い血潮の予科練の七つ鈕は桜に錨」、田中社長と丸山修作さんが肩を組んで唄っていた「貴様と俺とは同期の桜」も八十の作詩である。

本来は純文芸分野の詩人で、子息の西條八束氏は『父・西條八十の横顔』(2011)のなかに「もし父が三十代で亡くなっていたら、文壇での評価は現在よりずっと高かったのではなからうか」と書いている。また、筒井清忠氏は「日本の大衆に“詩”を与えたという点で、明治・大正・昭和の三代を通じて八十に比肩できる人はなく、今後も絶無であろう」と評価している。

特に流行歌にも八十にも関心があるわけでもないから、上記の説明は付け焼刃なのだが、ふとした成り行きで、八十の1925年

のパリ留学時の日記を読む機会があって、のめり込んだ。この日記帳はパリのAux Galeries Lafayetteの製本で、硬い赤の布表紙に1925と金文字でエンボスされた、しっかりした装幀、聖人の日のリスト、パリの劇場の構造と座席番号の図も載っている。八十は崩した自我流の崩した書体で、しかも旧仮名遣いに旧漢字を使って、読み取りにくい薄い鉛筆で書いているので、天眼鏡も使って判読には苦勞した。学生時代にUrdu語の小説を辞書を引き引き読んだ気分を思い出した。

八十は1924年の5月から翌25年の12月までパリに滞在した。彼は早大文学部の教師だったから、その縁で早大の留学生として渡仏し、ソルボンヌ大学の古典学部の聴講生になったと八十の娘の西條嫩子氏が『父西條八十』(1975)に書いているのだが、おかしなことに、日記には、彼がソルボンヌに通学する様子は一行も出てこず、きちんと教室で聴講したのか疑わしい。学生会館に詩人ポール・フォールの講演を聴きに行き、「役者のごとく面白かりしも長いので、閉口」という記述もあるが、彼の勉強はフランス人の詩人を家庭教師にして、アパートでミュッセやユーゴーなど古典作品を教材に学ぶことだったようだ。

この日記の内容が活字になっているのは、井上由理著の『ヴァーミリオンの女——画家 森田元子の生涯』(2022)に引用された二十数行だけで、八十の回想を書いた八束・嫩子両氏の著書では一言も言及されておらず、この日記の存在すら知らなかったと思われる。国書刊行会の出版した西條八十全集にも収録されていない。現存の西條家の人は『ヴァーミリオンの女』と私のこの文

章を読んだら、日記の存在を知ることになるはずだ。

森田元子さん(旧姓・山岸 1903～1969)は女流画家協会の会長、女子美の教授を務め、1960年に女性初の日展文部大臣賞を受賞、雑誌の表紙、新聞小説の挿絵なども手掛けた、昭和のトップクラスの画家である。

この本、お読みになりますかと、彼女の評伝『ヴァーミリオンの女』を見せられたとき、まず目に入ったのが、帯に書かれた「洋画家を夢みたパリでの日々、詩人西條八十との恋…」という謳い文句だった。この人の画家としての業績は知らなかったが、帯の言葉に小説的な面白さがあるように思えて、借りることにした。

1924年4月、21歳の山岸元子はNYKの賀茂丸で渡仏する。八十も同じ船に乗り合わせていた。彼は31歳、妻と幼い嫩子を日本に残しての留学である。パリで元子は女子寮に入居するが、そのこの食事が体にあわず、八十の通訳で何度か医師の診察をうけ、自炊のできるアパートに移ることになる。日記によると、台所を他の居住者と共用するアパートを八十が契約している。八十もそれまでのホテル暮らしを打ち切って、同じアパートに越した。

八十は1956年に出版した『唄の自叙伝』のなかで、1931年に封切られたフランス映画「巴里の屋根の下」の主題歌の翻訳を依頼され、原詩を観る前にメロディを聴いただけで、パリの思い出が蘇って、一気に歌詞を書き上げたと言っている。このシャンソンは昭和20年代にもよくラヂオで流れていたから、「巴里の屋根の下に住みて 楽しかりし昔/燃ゆる瞳 愛の言葉 やさしかりし君よ/鐘は鳴る 鐘は鳴る マロニエの並木路/巴里の空は青く晴れて 遠き夢を揺る」という歌詞に聞き覚えのある方もいると思う。

さらに八十は『唄の自叙伝』で、「ああいつの日にか二度と見るすべがあるろうか、ラクルテール街五番地のあの小さな愛の巢

を!…わたしは詩人、彼女は画家、短いパリ滞在の間、運命が二人を結びつけた」とあからさまに告白している。私が読んだこの本には、「森田元子様 恵存 西條八十」という手書きの献辞があった。

二人の関係はかなり知られたことだったようで、西條嫩子氏は「父と彼女が甘美な友情を些か感じたような気配がある。隣室に住んでいて、時には一つの鍋一つの釜で食事をわけあい、ホテルのあき部屋を時には一緒に仕事部屋に使って、芸術に精進しあったこともあったらしい」と記している。また西條八束氏は、父が女性との交流を好み、楽しい会話で雰囲気を楽しんでいたが、その折々のもので終わり、自分を見失わない人だったが、「その唯一の例外が元子さんだったと思う。元子さんは父の心の中に一生を通じて常に存在し続け、そのパリでの思い出は父にとって、かけがえのない、快く美しいものであったに違いない」と述べている。

しかし、八十の日記にはこの女性の容貌、性格、風情、言葉遣いなどに触れた文章は一行も出てこない。大詩人の日記なのだから、若い恋人に対する想いを詩的な文章で書いているのではないかと思ったのだが、期待外れだった。

「1月10日 ややくもりなれどあたたかき日。午後Sさんとゴオグ展覧会場へゆく。アンリ・オットマンの画をSさん二千五百フランにてかふ。テアトル・ポルト・サンマルタンにて火曜日の夜の“ビーヤ・ギン”の切符をかふ。電車にてかへる」

2500フランの絵を購入したSさんというのは誰なのか、まさか画学生の元子さんではあるまいと思ったが、『ヴァーミリオンの女』の中に、元子さんが主婦之友社の石川社長の依頼で選んで購入したと出てくるので、Sさんは元子さんだということになる。不思議なのは、日記の中では彼女はずっとSさんである。八十全集に収録されている旅行エッセイにはM嬢とかY嬢の略称で山

岸元子らしい人物が出てくるが、日記では、なぜかずっとSさん、それも他人行儀の感じの“さん”付けのSさんとなっている。

「1月16日 午前10時起床。ねすごしたりとおもひつつ、すぐ荷物の整理にかかる。紐などをかひにゆく。午飯に出かけると偶然斎藤、井上両氏にあふ。小雨の中を四人でブーランへゆく。一時にかへれば移転の自働車もう来てゐる。荷物を渡し、ガルソンや、ケースのおばさんに別れをつけ、タクシイにてポルトヴェルサイユの新居へゆく。整理の忙しさ。百三十五フラン支払ふ。おもてへ出て、肉、ねぎなどをかひ、そのほかの茶道具をかひもとむ。夜十一時就寝。」

今まで宿泊していたホテルから、アパートに移った日である。肉、ねぎなどを買ったとわざわざ書いているのは、自炊のできる生活の始まりに意気込んでいるように見える。斎藤・井上両氏と出会ってブーラン(食堂?)に行ったのなら三人のはずだが、四人で行ったというのは元子さんも同行していたのであろう。八十の日記には、いつの間にか一人増えていて、元子さんも同行していたことを示す箇所がほかにも見られる。また、この日に元子さんも同じアパートに越してきたはずだが、それについても八十は全く触れていない。

「1月18日 いい天気の日曜。朝のうちはメーレー・サンボリズム(ルノーの)を読む。あまり日和がいいので、午に御近所を散歩する。屋外はまったく気もちがいい。コンヴァンションの通りで、野菜だの、魚など、菓子だのかってかへる。ミモサの花とスイート・ピーの花束を右手に、左手にキャベツをかかへる仕末。たいした人通り。夜はひさしぶりに鯛の塩やきをたべる。「仏蘭西文壇の廿五年」を読みちらし、入浴して十二時就床。」

この日の記述からは、八十の浮き浮きした気分が読み取れる。元子さんについては一言も触れていないが、買ったものからみて、彼女も同行していたと考えて間違いあ

るまい。

アパートに移ってから「Sさんのためにモデルを一時間つとめる」という記述などが出てくる。日によっては「Sさん今日はいかないとて気嫌わるし」とか「朝、日本の新聞が来たので読んでみると、なんとなく、さみしくなってしまうて、それでだめ。Sさんのモデルになるのをいやがり、すっかりきげんをわるくさせてしまふ」といった文章が見られる。俯き気味の姿勢で本を読んでいる八十を描いたデッサンは八束氏・井上氏の著書に収録されており、いかにも詩人らしい雰囲気がある。

1月と2月はほぼ連日、日記をつけているが、3月頃からとびとびになり、晴、うす曇り、出かけた、誰誰とあった、観劇に行く、支那飯を食べた、夜活動に行くといった繰り返しが多い。(当時は映画という言葉がまだ生まれていなかったのか、八十はいつも“活動”と書いている。シネマは“し子マ”、自動車を“自働車”となっている)

2月5日から16日まで、八十はSさんとカンヌ、ニース、モナコ、アルルなど南仏へ旅行し、この期間の日記は圧縮された旅行記ともいえる。カンヌを訪れた日には「あくまで華やかな真晝。さみしさかぎりなき夕ぐれ」と詩人らしい文章をのこしている。

2月15日の欄に意外な記述が出てくる。「アルル宿-60フラン、アルル～アヴィニヨン-22f、宿・チップ-12f、切符-6f、アヴィニヨン・タキシイ-17f、マルセーユ～アルル-38f、食事-26f、山岸出-200f、マルセーユ食事-22f」といった旅費のメモで、「山岸出」というのはSさんが八十に200フラン渡したとの意味であろう。

ここで初めてお金の話が出てきた。パリで活動を観たり、レストランで食事をしたとき、誰が払ったのか、日記には書かれていないが、十一歳も年下の若い女性が連れなのだから、当然八十がおごっていたと推

測される。しかし、南仏旅行は自動車賃、ホテル代などそれなりに大きめの出費だったはずだ。この旅の間に、費用は割り勘にしようという協定が成立したようである。まさか、八十が言い出したとは思えず、Sさんが私も払いますと言い出したのだろう。旅行のあと、日記は簡略な行動の記録よりも、出費の明細と割り勘の計算が多くなってくる。7月1日の記載はこんな具合だ。

西条支出

牛乳、パン 51.60 買物 4.60
女中 10f 洗濯ヤ 15.15f
山岸ヘカシ 100f

山岸支出

食品 11f 魚 18f 肉 3f

ページの余白に、それぞれの支出の足し算、それを半分に割り勘にした割り算、精算すべき差額の引き算が読みにくい字で書き込まれている。いつの間にか、活動も活動へ行くタクシー代も割り勘になった。『ヴァーミリオンの女』の中で井上由理氏は二人の生活を「世にいう同棲ではなく、現在のシェアハウスといったところであろうか」と述べているが、上記のように食料品、女中、洗濯ヤも共用していることから、親密度は明白だ。

こんなワリカン計算のなかでは、八十は“Sさん”とは呼ばず、常に“山岸”であり、“元子”でもなかった。愛称らしい呼び方がない、他人行儀とでもいうか、一線を画した間柄だったかのようにも聞こえる。

西条嫩子氏は『父西條八十』に「海外留学費が大正末期とはいえ、二年間で四千百円の貧しい父にひきかえ、主婦之友社からの多額の援助費を送られていた彼女（＝山岸元子）は毎日モデルをやとって塑像にはげみ、のちに現今の秀作を重ねてられるように、油絵に転身されたようである」と書いている。

この文章だと、まるで八十が苦学生であったように聞こえるが、日記帳で見ると、家庭教師に詩人と家主のマダムの人

を雇い、女中もいるし、二、三日おきに活動や芝居を観に行き、外出にはタクシーを頻繁に使い、時には詩集を一度に二十冊も買い込んだり、旅行もしているのだから、金に困った生活だったとは思えない。嫩子氏の父親の愛人に対する感情が透けて見える。

八十の留学は2年間の予定だったが、不明の事情で急に短縮され、1925年の12月下旬に帰国の途に着いている。あわただしい帰り支度だったのか、蔵書の一部と日記はSさんの手元に残された。

翌26年の2月、Sさんも帰国。八束氏の著書に、父親の遺品の中にあつた「一九二六年三月七日 元子」と署名のある写真が掲載されている。Sさんは自分の写真を送ることで、別れの意志をはっきり示し、同時に私を忘れないでほしいと伝えたかったようだ。きれいな別れ方ともいえるが、妻子のいる男のところに自分の写真を送るとするのは、23歳らしい無謀さがある。彼女は1927年5月に森田俊彦氏と結婚、一男二女を育てながら、洋画家として頭角を現す。八十は彼女の作品展を必ず観に行っていたと言われるが、元子氏はパリ滞在時の知人たちの集まりには出席せず、八十と出会うのを避けていたようだ。しかし1947年に夫の俊彦氏が死去してから、細かな経緯は不明だが、友人としての付き合いが復活し、元子氏の息子と次女の結婚式に出席している。1959年11月15日、息子の恭生氏と由美子氏の挙式の時には、元子氏が大判のアルバムとカラーペンを準備し、参席者たちに祝いの言葉を書かせた。八十は黒いペンで次のような即興の詩を書いている。

白菊のかをる このあした
秋空たかく 翔けて行く
つばさ並べし 二羽の鳩
若く佳き日を 頌えざらめや

この詩は寄せ書きアルバムにひっそり眠っていたもので、発掘されて活字になるのは、この拙文が初めての八十の作品である。

驚いたのは、西条八束氏の『父・西條八十の横顔』の中に、私が読んだのとは違う八十の1925年の日記帳とその中の1ページのフォートコピーが載っていることだった。日記帳の表紙に1925とエンボスされているのは同じだが、デザインが違う。抜粋されている1ページには日付がなく、確かに八十の筆跡だが、私が読解するのに苦労した崩した書体と違って、読み取りやすい筆跡である。

「この巴里の日記で、名を知らない、まだ会った事もない、或いはこの世にいないかも知れない未知の愛人、あなたに、かきおくりします。私がいままで愛してきた人の誰かに、かき送るのが本当かも知りません。けれど不幸な私は小さい事の一つでも裏切られることが淋しい人間です。信じた後、いつも淋しい思ひをしなければならなかった私です。まだ会った事もない、又何の交渉もなく終るかも知れないあなたにかき送る方が、淋しいそしていつも孤独の私にとって一番、静かな、そして心をきない日記であります。」

八束氏の著書に転載されているのはこの1ページだけで、注釈もついていない。八

束は日付のないこの文章を日記と呼び、感情のこもった詩的な言葉で綴っているが、これは日記ではないと思う。小説の書き出し、あるいは創作ノートとでも呼ぶべきか、人に読ませるために書いた文章に見える。Sさんの目に留まるのを期待して書いたものかも知れない。

彼は2冊の日記を使い分けていたのか。八束家にある日記を読ませてもらえたら、この謎は解けるのだが、そういう伝手もない。私が読んだ日記は、何時に起きた、誰と会った、出かけた、雨が降った、それに生活費の割り勘の計算メモといった味気ない記録で、ほんの二、三箇所だけ詩人らしい文章が出てくる。2冊を使い分けていたとしたら、八束氏のところにある日記の1ページのような多少詩的な文章が、こっこの日記にも出て来るのだから、使い分けていたようにも思えない。

注目すべきは、嫩子・八束両氏の著書には「父の巴里日記によると…」といった引用が一度も出てこないことだ。こう考えると、八束氏のところにある日記帳は、日記ではなく、創作ノートだったのではないかと思う。



会員寄稿文

「ことば」に関する随想

大 村 善 勇

(1) カタカナなのに読めない

ーフィンボガドチル大統領

一九九七年前後だったと思います。この名前を新聞で見ました。アイスランドの大統領（女性）だそうです。このカタカナを初めて見たとき、どういうふうに読むのだろうかという疑問がまず頭をよぎりました。これが、ONE WORDとは思えないので、どこで息継ぎをするのだろうかと考えた訳です。例えば、フィン・ボガドチル だろうか、あるいは、フィンボ・ガドチル。あるいは、フィンボガ・ドチル、フィンボガド・チル のいずれかであろうが、アイスランド語を知らないと読めないなあ、と諦めておりました。できれば、NHKなどのアナウンサーがどう読むか、耳を澄ませてみたいと思ったのですが、これが果たせないままに時間だけが経過していたのです。

拙著「街角のイギリス英語」では「ウラジオストック」を取り上げました。これも、どこでポーズを入れればよいのか、カタカナだけでは分かりません。子供の頃、「浦塩」などという漢字を見せられていた記憶があるので、ウラジオ・ストックだろうと思っていたら、これがとんだ間違いだったことが分かり、拙著で取り上げました。（ロシア語の発音に近い書き方としては、ウラディ・ボストーク です。）

さて、フィンボガドチルを新聞で見てから数年が経過したある日、月刊誌「言語」で「フィンボーギのむすめ(ドッティル)」の意味だとの解説を読んだ結果、「フィンボーガ・ドッティル」が正しいことが分かって、ようやく気分が落ち着いた記憶があります。この発音で正しい、と言ってしまっただけは言い過ぎかもしれませんが、アイスランド語の間（ポーズ）の取り方に極めて近い、

としておきます。全く馴染みのない言語では、カタカナを見せられても読めないことが、起こり得るのです。

蛇足となりますが、アイスランド語は言語学上の大分類では「ゲルマン語派」に属し、スウェーデン語、ノルウェー語、デンマーク語などと並んで「北ゲルマン語派」に分類されています。ノルウェーなど北欧の人に多い名字、例えば、グスタフソン、ヤコブソン などに見られる「ソン」は、息子を意味する（例えば、グスタフの息子＝グスタフソン、と言うように）とのことですが、娘を意味する「ドッティル」もあることが、この大統領の名前から分かりました。もう一つ、蛇足の上塗りをすれば、「フィンボーギのむすめ(ドッティル)」が、「フィンボーガ」と変化していることです。名詞の格変化によるものであろうと推測しましたが、確信がもてないのでアイスランド語の専門家である田邊丈人氏に教えを乞いました。予測どおり、フィンボーガはフィンボーギの属格であることを知りました。まったく見ず知らずの小生の質問に丁寧にお答えいただいた田邊氏にこの場をお借りしてお礼を申し上げます。

(2) サランラップ

海外駐在を終えてから数十年が過ぎた今になっても、思い出しては、時折、家内と笑ってしまうのが、「サランラップ」です。ロンドンに住み始めて間もない頃、家内が近所の雑貨屋で、「サランラップを欲しいのですが・・・」と尋ねたことから話が始まります。サランラップは商標名ですから、商品名をそのままここでとり上げることは、適当ではないかも知れませんが、話の進行上、やむを得ないのでお許しいただきたい

と思います。

さて、「サランラップ」と聞いた商店主は分かるはずもなく、何回も聞き返してきたそうです。やがて家内が、どういう形状のものであるか、この商品の使い方などをたどたどしい英語で説明をすると、「ああ、フィルムのことか？」となったそうです。今度は、びっくりしてしまったのが家内です。「違う、違う、photo film ではない」と汗をかきながら説明しているうちに、店主はフィルムの入っている箱を持ってきて、これだろうと、言ってくれたそうです。食品包装用のフィルムを英語では、cling filmと言います。clingは、「くっ付き易い」商品の性質を表わしています。商店では、普通は略してフィルムと言っています。わが国ではフィルムと聞けば、写真を撮るときに使うフィルムを直ちに連想しますが、英語では、薄い膜状のものであれば、filmと言うようです。家内によれば、「サランラップ」は輸入品であったので、英語圏で通じる商品名であると思っていたそうです。

(3) チャールズ皇太子（当時）のスピーチ

「王様は、one of the oldest professionsである。」

主語の部分が、kingであったのか、royal familyであったのか、記憶は確かではないのですが、チャールズ皇太子のスピーチの冒頭部分でこの発言が飛び出したのです。スピーチを和やかに滑り出させるべく、このジョークを「枕」としたものでしょう。彼の期待通り、聴衆の間に笑いが拡がりました。ジョークを解説するのは野暮のそしりを免れないのですが、the oldest profession（最も歴史の古い職業）と言えば、「売春」を示唆します。「王様という職業」と「売春」を同列に並べて見せたと言うことなのでしょう。

一方、チャールズ皇太子（当時）は、1984年、ロジャーズ卿（Lord Richard Rogers）が設計したナショナル・ギャラリーの拡張計画案を“monstrous carbuncle”であると

酷評しました。carbuncleとは、普段あまり眼にしない単語ですが、辞書によれば「癩」（よう）とあり、「腫れ物・おでき」のことです。醜く膨張する都市を「おでき」に例えるのは英国の伝統らしいのです。小池滋著「もうひとつのイギリス史」（中公新書）によれば、十九世紀初頭の文学者・ジャーナリストであるウィリアム・コベットは、急速に膨張するロンドンを「おできの親玉」（Great Wen）と呼んだと言う。因みにリーダーズ英和辞典にはthe Great Wenは「ロンドンの俗称」と載っている。ニューヨーク市をthe Big Appleと言うケースとはちょっと違うとは思いますが・・・。

ロジャーズ卿は、パリのポンピドー・センターの設計者として有名でしたし、ロンドンのシティにあるロイズ・ビルの設計者でもあります。特定の芸術作品や建築物を皇太子という立場にある人物が酷評すると言うのは、わが国では考えられないことですので、「monstrous carbuncle」発言には驚きました。

(4) ミュンヘン

夏休みを利用して、南ドイツを駆け足で回ってロンドン郊外の自宅に戻りました。玄関脇に停めた車のトランク（英語では、boot）から旅行かばんを取り出していたのを見た隣家のご主人が「どこへ行ってきたの？」と家内に尋ねたそうです。家内は、「ミュンヘン」と答えたのですが、これが隣家のご主人には分かりません。何回か聞き返された家内は、「南ドイツのミュンヘン」と繰り返した結果、「おお、ミュニッック」となったそうです。

日本で教えられるヨーロッパの地名は、現地で発音される音になるべく近くと考えられている所為でしょうか、ミュンヘン、チューリッヒ、ウィーン、などと教えられますが、英語国民は、だいたい英語流に読んでしまうので、日本人の発音では分からないことが起き得ます。ミュンヘン → ミューニッック、チューリッヒ → ブーリッ

ク、ルツェルン → ルサーン、ウィーン → ヴィエナ、ヨハネスブルク → ジョハネスバーグ、ドナウ → ダニューブなどは、憶えて置かれる方が良いでしょう。(太字にアクセントを置く)

一方、日本語で定着してしまった地名である「カブル」(アフガニスタンの首都)は、どうにかならないものかといつも思っています。この地名をローマ字で示せば、KABULですが、現地語に近い音としては、「カブル」です。「カ」が長い。従って、「カブル」と言った場合は、「京都」を「キョトー」と発音するようなものなのです。しかし、いまやどうにもならないでしょう。このほかに、どうにもならない地名として、「タヒチ」があります。現地に住む友人は、現地語には「チ」という音がないので、「タヒティ」にしてもらいたいと頑なですが、もはや、どうにもならないでしょう。

(5) go for a burton

The New Year's resolution has gone for a burton. と言えば、お正月にたてた誓いが「水泡」に帰した、あるいは、ビールの泡のように消えてしまった、とでも訳すと英文のニュアンスに近いのだらうと思えます。

go for a burton をコリンズ英英辞典でひくと、1) to be broken, useless or lost, 2) to die が載っています。私の友人(英国人)によれば、英国の地名Burton-upon-Trentから出た表現だと言います。Burton-upon-Trentは、醸造業の盛んな土地で、ALE(エイル:ビールの一種)が美味しい町として有名です。Burtonが地名とすれば、go for a burtonと地名が小文字になっている上、不定冠詞(a)が付いているのは、なぜだか分かりません。どなたか、ご教示いただけるとありがたい次第です。いずれにしても、このフレーズは英国でしか通用しない「俗語、或いは方言」であろうと思えます。

(6) 友人への手紙

carry coals to Newcastle

20年ほど昔のことですが、高校の同窓会を土曜日の午後、藤沢市で開くとの連絡を受けました。高校は神奈川県藤沢市にありますので言わば地元で集まろうと言うものです。同窓生の大部分は、いまも藤沢、鎌倉、茅ヶ崎など、いわゆる湘南地方に住んでいるのに対し、私は現在、千葉県の某市に住んでいるため、普段、友達に合う機会が殆どありません。従って、同窓会には出来るかぎり出席するよう努めていました。それに、このときは、翌日の日曜日に茅ヶ崎市の親戚が行なう法事に家内と共に出席する予定になっていましたので、同窓会のあと藤沢で一泊することにしました。土曜日の昼過ぎに藤沢のホテルにチェックインしたあと、家内をホテルに残して私は同窓会に出席しました。

以下の手紙は、同窓会で久しぶりに逢った友人に宛てたものの一部です。

.....

英国のNewcastle upon Tyneは、英国で採掘される石炭の集積地および積み出港として有名な町です。言ってみれば、町中に石炭があふれているような町です。(余談ですが、ニューキャッスルではなく、英国では、ニューカースルと発音します)

従って、carry coals to Newcastle(ニューカースルに石炭をもって行く)は、「余計なことをする」或いは、「無駄骨を折る」という意味になります。

あの日(高校の同窓会が行われた日)は家内にとっては、全く知らない町(神奈川県藤沢市)に殆ど半日たった一人で放り出されたわけです。その所為でしょうか、家内は一寸違った意味での「やけくそ消費」をやっていました。おかげで(?), 翌日は、ブレザーや靴などの余計な荷物をさげて法事に向かうハメとなりました。家内によりますと、我々が住んでいる町と違って、藤沢の商店では、センスのよいものを売っているのだそうです。家内を藤沢に連れて行く、或いは、

家内を藤沢にひとりで放り出しておくと、思わぬ出費をみることになるので、carry coals to Newcastle の向こうを張って、leave one's wife alone in Fujisawaに与える適訳はなにか、いま思案しているところです。・・・(以下、略)

(7) 「ワスプ」又は「ウォースプ」

英国滞在中、ロンドン郊外にあった拙宅の小さな裏庭には、果実のなる樹が数本ありました。プラムは美味しそうなので、色付くのを待って毎年採りましたが、西洋梨は実が小さく余り美味しそうではないので、放って置きました。鳥がつづくに任せ、或いは、熟して落ちるに任せていました。ある日、庭の芝刈りをしていきますと、隣家のご主人が塀越しに声をかけてきました。「ワスプに気をつけろよ」と言うのです。西洋梨が熟すと「ワスプ」が群がってくるのです。wasp即ち、スズメバチです。WASP = White Anglo-Saxon Protestant (米国の支配的特権階級を形成するアングロサクソン系で新教徒の白人) と同じスペリングですが、こちらは危険なスズメバチやジガバチを意味します。日本語では、ハチの類は、すべて「ハチ」をベースにして「ミツバチ」「スズメバチ」「クマバチ」などと言いますが、英語では、bee, honey bee, drone, wasp, hornet などと全く別の単語を用意しているのです。この章のタイトルを「ワスプ」又は「ウォースプ」としたのは、両方の発音があるからです。

(8) ダッフォディルとクロッカス

英国ロンドンの冬は良く知られるように陰鬱な季節です。五年余り住んでみて、冬の季節に関する大掴みの印象としては、殆んど毎日、霧雨が降り続き、午後三時半から四時ごろには暗くなってしまう、気分的にも重苦しい季節でした。そんな陰鬱な冬が終わりかける頃、二月末か三月の初め頃だったと記憶しますが、真っ先に目にする花は、クロッカス (crocus) でした。大体

が大木の根元に群生していたように記憶します。遠くから見ると、真っ黒な地面がそこだけ、白や黄色に薄く染まっていることがあり、近づいてみるとクロッカスが咲き始めているのを発見します。この時は、ようやく春が来たことを実感するときです。

春、クロッカスに続いて咲く花は、daffodil。発音は、「ダッフオディル」。スイセンです。和英辞書で、スイセンを引くと narcissusが出てきますが、daffodil が一般的です。narcissusは英国で聞いたことがありませんでした。日刊紙ザ・タイムズは春になると、どこそこのダッフオディルが咲き始めたという記事を写真付きで出したものです。(大学で英文学を専攻した人には、ダッフオディルはワーズワズの詩によって、良く知られているそうです。)

(9) トローリーとカート (trolley vs cart)

英国では冬になると、雨の日が多くなります。雨と言ってもざあざあ降る雨ではなく、霧雨のような細かい雨が、降るともなく降ると感じる雨です。このような雨の日が多い所為でしょうか、或いは、日本とは芝生の種類が違うからでしょうか、ロンドン近郷では、冬の間も芝生だけは緑色です。陰鬱な鉛色の冬空の下で、牧草地や公園の芝生の緑色をみると何か、心安らぐ思いをしたものです。寒々とした景色が、そこだけマイルドになるのです。降り続く雨の所為で、冬になると、ゴルフコースではトローリーを曳いてのプレイが禁止されます。芝が水分を含んで柔らかくなっているので、轍 (わだち) によって芝を傷めてしまうからです。初冬のころは、wide tread付きのトローリーなら許されることもありますが、雨が降り続くと、キャディバッグを担いでのプレイとなるのが普通でした。(Trolley with wide treads は接地面の広い車輪を付けたトローリーです。)

英国でのトローリーですが、米国では、カートと言います。米国のゴルフ場では、pull-cart と言うのが一般的のようです。

スーパー・マーケットで買い物をするとき
に使う手押し車、英国での shopping trolley
に対して、米国では、shopping cart となり
ます。

(10) ナスを英語で言うと、

野菜のナス。終戦直後であったと思いま
すが、八百屋の店頭でペイナス（米茄子）
という丸く太った大きなナスを見てびっく
りしたものです。随分古いことですので、
若い人たちには通じない話かもしれませんが
が……。欧米にはナスを使った料理が色々
とあります。「ナスのマッシュルーム詰め」、
「ナスのムニエル」とか「ナスのポルトガル
風」などが英和辞書に載っているほどです。

ところで、ロンドンの八百屋でナスを買
おうとして、eggplant と言っても通じませ
ん。我々が学校で習ったのは、eggplant で
あった筈ですが、英国では、aubergine
（オーバージーン）と言います。英国の友人
にこのことを話したら、eggplant は別
の種類だと言います。この別の種類である
という eggplant を、英国在勤中に見たこ
とはありませんでした。上で英和辞書に載っ
ていると申し上げた「ナスのマッシュルー
ム詰め」などの料理名では、aubergine が使
われています。フランス語ではナスを au-
bergine（オベルジーン）と言いますので、
フランス語からの借用語であろうと思いま
す。米国では、eggplant で通じるそうです。

(11) 大きなお世話

20年ほど前に知り合いのある女性から聞
いた話です。仮に飯田さんとしておきます。
飯田さんは、ご主人の転勤に伴って、米国・
ニューヨーク市近郷の町に数年間住んだこ
とのある人です。在米中に知り合ったアメ
リカ人の友人が、先日、日本を訪ねて来た
ので、友人の東京滞在中は、飯田さんがな
にくれとなく世話をしたのだそうです。飯
田さんご自身は、現在も地域にあるテニス
クラブで活躍するなど、活発で社交的な人

柄ですし、アメリカから来た友人には献身
的なお世話をしたであろうことは、想像に
難くありません。この米国からの客人は日
本の滞在を十分に楽しんで、いよいよ日本
を去る日となりました。飯田さんは見送り
がてら車を運転して空港まで送り届けたと
ころ、この友人は、別れ際に飯田さんを強
くハグして、日本語でこう言ったのだそう
です。

「大きなお世話になりました。」

「あら、わたし、なにか余計なことをし
ちゃったかしら、と思っちゃったわ。」

こう言って、飯田さんはユーモラスな話
をしめくりましたが、ここには聞き流す
ことのできない面白い問題を含んでいると
思いますので、取り上げた次第です。

「大きなお世話になりました」を分析して
みます。まず、ここで使われた単語をばら
ばらにして、各単語のそれぞれの意味を考
えれば、完全に間違いだと言えるところは
ありません。例えば、問題となる単語「大
きな」にしても「それは大きな問題だ」と
か「規模の大きな会社」などで使われる
「大きな」は、意味のウラを読む必要はあり
ません。しかし、「大きなお世話」とつなが
ると、感謝を表現することとしては適切
ではなくなります。それどころか、逆に、
世話した人を怒らせてしまう危険性すらあ
る表現となってしまいます。「大きなお世
話」に類する表現に、「大きな顔をする」
「大きな口をきく」（或いは、「大きな口をた
たく」）があります。外国人に日本語を教え
る場合、「大きな」は特殊用例として collo-
cation（連語関係）をも教える必要がある
単語だと思った次第です。

翻って、我々が英語の文章を綴るときに
は「和英辞典」を傍らに置いて、それぞ
れの単語の意味を確かめながら文章を作
って行きますが、単語の組み合わせ（連語
関係）によっては、上の例のように、お
かしなことになってしまう危険はないの
か、考えてみる必要があると思うのです。

会員寄稿文

ウクライナ・中国と大阪・神戸

山 邑 陽 一

コロナ明け?の今年の夏(6-9月)は、猛暑にもかかわらず転宅の準備も重なって、出かけることが多かった。神戸から大阪・東京・倉敷・芦屋・御影・有馬などを訪れた。9月28日の大阪倶楽部でのピルゼン会(ビール・軽食つき音楽会)では、関西二期会で「ワルキューレ」や「魔笛」を歌う本格派のオペラ歌手二人が、日本ポップスの元祖・服部良一の曲を15曲も歌ってくれた。別れのブルース・山寺の和尚さん・雨のブルース・一杯のコーヒーから・懐かしのポレロ・夜のプラットフォーム・蘇州夜曲・湖畔の宿・小雨の丘・東京ブギウギ・胸の振子・東京の屋根の下・青い山脈・銀座カンカン娘・買い物ブギである。最後に90人くらいの出席者がみんな「青い山脈」(良一が車窓から戦後も変わらぬ青い六甲山脈を見て作った・作詞は西条八十)を斉唱した。10月からのNHKの朝ドラで笠置シズコが主演となる前祝いでもあって、ふだんはクラシック音楽を聴くことが多い会場が、この日も大いに盛り上がった。

服部良一は大阪生まれ、国民栄誉賞を受けた作曲家で、ウクライナ人エマニュエル・メッテルがその師である。メッテルはロシア革命後の混乱を避けハルピンに居たところを、戦前にJOBK・大阪放送局の管弦楽団創設時に日本に招聘され指揮者となって神戸に住み、良一は楽団のメンバーとなった。メッテルは宝塚歌劇場にも関係したから、バレエのプリマドンナだったメッテル夫人もそこで活躍した。メッテルが京大オーケストラを指揮したときに教えを受けたのが、朝比奈隆であった。9月10日から16日までの大阪クラシック週間では、在阪の五つのオーケストラとその楽員たち含む

在阪音楽家たちが、市内の数多くある大中小ホールに分かれて演奏し、その60番目の最終公演をフェスティバル・ホールで私が聴いた。朝比奈が育てた大阪フィルハーモニーが、リストの前奏曲とムソルグスキーの「展覧会の絵」を演奏したが、後者の「キエフの大門」を含む全曲が、美しい音色と堂々たる風格をもち、夜半の公演なのに観衆の拍手が鳴りやまず、指揮者の大植英次が立ち往生した。大阪の音楽をこのように素晴らしくしてくれたその淵源に、メッテルがいた。

ロシア革命後に日本に来たウクライナの音楽家は他にもいて、東京へ来て活躍したピアノのレオ・シロタやヴァイオリンのアレキサンダー・モギレフスキーが有名である。白系ロシア人もたくさん日本に来た。神戸へもたくさん来た。いま私が住むJR垂水駅の駅中店には、モロゾフとゴンチャロフの菓子店が並んで出店しているが、創業者は共にそのとき日本へ来た白系ロシア人である。いまウクライナ戦争のさなかにも、多くのウクライナ人が神戸に来ている。夫婦と娘さんと三人で神戸に来て、バレエを教えている一家もある。歴史は繰り返す。早く戦争をやめてもらいたい。

垂水区には、日本に一つしかない「孫文記念館」が舞子にある。巨大な明石海峡大橋がすぐ横に架かったので、ほとんど橋の下になってしまったが、呉錦堂という戦前に神戸に来た華僑が建てた美しい六角形の洋館である。孫文は死の前年1924年に神戸高等女学校で講演し「あなたがた日本民族は、すでに欧米の覇道の文化を手に入れているうえに、またアジアの王道文化の本質をも持っておりますが、今より以後、世界

文化の前途に対して、結局、西方覇道の手先となるのか、それとも東方王道の干城となるのか、それはあなたがた日本国民が慎

重にお選びになればよいこととあります」と述べて、講演を締めくくった。今はこれをそのまま今の中国へ問い返したい。

コーヒーブレイク

早瀬三郎名誉会員の百寿のお祝い

10月初めに吉本邦晴さんと一緒に、早瀬三郎さんを、介護施設に御見舞しました。添付はそのとき撮った写真3枚です。早瀬さん自身と、岸田総理からのお祝いの書面と、お祝いの銀盃が映っています。



会員寄稿文

グローバル経営戦略とビジネスインテリジェンス —ビジネスインテリジェンスの活用法—

Global Business Strategy and Business Intelligence -Management of Business Intelligence-

中 川 十 郎¹⁾

要旨

ビジネス インテリジェンス（高度経済、経営情報）のグローバルビジネス、経営戦略への適用に関し、その歴史とグローバル経営戦略への活用について具体的事例を基に、これまでの32年間、183回（研究会参加者累計16,000人、講師累計（600人）の「日本ビジネスインテリジェンス協会」（Business Intelligence Society of Japan）での研究成果を基に、論考する。

キーワード：ビジネスインテリジェンス、グローバルビジネス、情報の収集、分析、活用、リスクマネジメント、危機管理、情報の機密保持、ビジネスインテリジェンス理論、情報監査、AI、ChatGPT

1. はじめに

日本では情報に対する研究が欧米諸国に比べ、遅れている。また情報分析、活用も政、官、学、財界においても諸外国に比べ、大幅に遅れている。情報はただとの認識で、情報（Information）と情報を分析、付加価値を付けたインテリジェンス（Intelligence）の違いも認識が希薄である。

BIG DATA、AI（人工知能）、Chat GPTが急速に広まり、さらにSNSが氾濫、Fake Newsも拡大している。

そのような現状下、情報、とくにビジネスインテリジェンス（高度経済、経営情報）の収集、分析、活用法の習得は、高度情報化時代を迎え、必須となりつつある。

以下、特にグローバル化時代のビジネスインテリジェンス活用について、事例も交えつつ論じたい。

インテリジェンス、情報論の観点から見た場合、官民とも政策決定に際し、その意思決定の基礎、基盤となるべき情報、すなわちインテリジェンスの収集、分析、活用

が十分なされていないように見える。よって。我が国の政策決定や企業内外の経営戦略策定は不十分な情報と情報分析不足により危機的状況にあるといえよう。

古来、日本に於いては「空気」、「水」、「情報」はただとの意識が強い。それゆえ、情報収集に十分な資金、人材を投入せず、さらに収集した情報の情報源精査、情報分析、情報監査も十分しないまま、政官民とも安易に政策決定をしている傾向が強い。

2. 日本の三つの敗戦、「武力敗戦」、「金融敗戦」、「情報敗戦」

日本は過去、三つの敗戦を経験している。一つ目が太平洋戦争での1945年の「武力敗戦」である。

特に、ミッドウエー敗戦は旧日本海軍の情報敗戦の典型例とみなされている。情報を軽視し、精神力で戦った日本軍に問題があったと思われる。

二つ目が1990年代からの我が国経済の長期低迷で、これは「経済、金融敗戦」であ

る。90年代以降、実に30年にわたり、日本経済は低迷を続け、経済学者の野口悠紀雄氏などは著書『日本が先進国から脱落する日』や、投資家のジムロジャース氏も『捨てられる日本』でこのままでは日本は衰退するばかりで立ち直れないのではと日本の将来に対し悲観的な見方である。さらに2008年のリーマンショックは日本経済衰退に追い打ちをかけ、日本の不動産、とくに、主要銀行に壊滅的打撃を与え、主力銀行は生き残りのために軒並み合併に追いこまれた。

かつて、日本は1980年代後半、筆者のニューヨーク駐在時代、米国を追い詰め、世界で1～2位の競争力を有していた。GDPでも米国に肉薄し、世界第2位の地位を占めていた。しかし、2001年にWTOに加盟し、経済成長、貿易が拡大した中国に2010年に追い抜かれた日本は現在、中国にGDPで4倍以上の差をつけられ、差は急速に拡大しつつある。GDP per Capitaでもシンガポールや台湾、韓国にも追い抜かれつつある。

一方、2023年4月に人口で中国を抜き去り、GDPで22年に旧宗主国の英国を追い抜いたインドは世界第5位に躍進。さらにインドはグローバルサウスの盟主とし23年9月のG20会議を議長国として成功させた。この勢いで2025年にはGDPでドイツを、2027年には日本も抜き去り、米国、中国に次いで世界第3位の経済大国に躍進するとみられている。

かつてハーバード大学教授のエズラ・ボーゲルに「ジャパン アズ No.1」と喧伝された日本は衰退の一途にある。しかし日本は官民ともに危機感がなく、東海の小島で太平の夢をむさぼっている情けない状態にある。

三つ目の「情報敗戦」の典型的な例は2011年3月の「福島原発事故」、さらに2019年から流行した「コロナ禍」への対応例である。東京電力は地震への対応をおろそかに

し、「危機管理」対策に致命的失敗を犯した。

危機管理の要諦は迅速な情報収集と分析、活用にある。

福島原発事故の対応を見ると、すべてが後手、後手にまわり、十分な情報に基づいた対策がとられていない。情勢判断、対策の基礎となる情報、特にインテリジェンス入手が不十分で、重要な致命的情報を迅速に収集しようとの努力もなされていなかったように見える。日本政府関係機関、東電の連携による政府中枢との迅速な情報収集、分析、意思決定が組織的に機能していなかったのではないか。十分な情報がないまま政策、対策を立てるに際し、情報収集やその情報に基づきだれが対応策の決定をしたのか、はっきりしない。

CIO（最高情報責任者）はだれで、どういうルートから情報を吸い上げ、だれが責任をもって、その情報を分析し、最終意思決定を行ったのか、不明である。

原発危機に際し、政策、対応、決定のための我が国の国家情報システムはいかに作動したのか。原発事故後、その情報収集、伝達、分析、政策決定に関する十分な検証がなされていないのではないか。国家情報システムの検証と、必要により、早急なる再構築が望まれる。

危機管理に際しては、まず迅速な情報収集と、その情報分析、活用が肝心である。十分な情報なくして危機管理は不可能である。事故が発生してから、応急、対策を行うのではなく、事前に十分に情報を収集し、それを基に予防措置を講ずるのが危機管理の要諦である。

以上の観点から東京電力の対応を見ると、リスク管理、危機管理体制が十分に構築されていなかったのではと推察される。原発事故は国民の健康に甚大な影響を与える。

今回の原発汚染水（政府は処理水と言っている）の海中への放出に関しても、危惧を抱いた太平洋諸国家、中国、韓国などアジア諸国への説明と了解取得が十分になさ

れたとはいえない。日本の一方的かつ早急な放流は一考の余地があると思われる。ここでも情報の収集、分析、配布が重要であることを十分に認識すべきであろう。

一方、コロナ禍に関しても情報の収集、分析、配布について情報論的に種々問題がある。コロナ対策にいても情報の一元管理が十分でなく、また政府関係機関連携に問題があった。さらに感染者などの集計に関しても、感染者や感染情報をFaxで送付するなどAI時代に前近代的な対応がなされていたことが明らかになり、厚生省をはじめとする日本の医療機関のIT化が諸外国に比べて極端に遅れていたことが判明した。

これに比し、諸外国、中でも台湾の医療関係情報システムが進んでいることは大きな関心と呼んだ。

一方、日本の医療研究が遅れていることも明らかになった。コロナワクチン開発に於いても大幅に出遅れており、国産ワクチンはなく、欧米から高価なワクチンを大量に輸入せざるを得なかった。

これに比し、欧米に加え、中国、ロシア、なかでもカリブの医療先進国キューバが2種類のワクチンを開発。発展途上国に供給したことは大きな話題と呼んだ。

日本のイベルワクチンはアフリカやインドでも関心と呼んだとのことだが、なぜ日本で活用されなかったのか、精査する必要があるのではないか。

さらに情報論の観点からみると日本政府のワクチン購入は、国民の税金で輸入されているもの故、購入価格、購入数量、廃棄された数量、在庫数量など国民に公開すべきであると思われる。

あわせ日本独自のワクチンも将来に備え、国家戦略として早急に開発に全力を挙げるべきだと思われる。

以上、「福島原発事故」、さらに「コロナ禍」では「武力敗戦」、「経済・金融敗戦」

の教訓が活かされておらず、我が国は三度「情報敗戦」の瀬戸際にある。その対応には情報を十二分に収集し、それを分析、活用するインテリジェンス力が強く求められている。

3. 情報化時代の機密保持

次に情報化時代に盛んになっているサイバー攻撃を避けるためにも情報の機密保持が非常に重要である。機密保持に関連し、具体的理論を下記紹介したい。

ビジネス インテリジェンスの重要な役割の一つに「情報の機密保持」がある。インテリジェンスのグルと目されたスエーデン・ルンド大学ステバン・デジエル博士は1970年代初めに世界で初めてルンド大学に「ビジネスインテリジェンス」講座を開設したことで有名である。デジエル博士の講座ではまず冒頭に「情報の機密保持」を強調し、重視した。

インテリジェンスの重要な役割の一つに「情報の機密保持」がある。最近の度重なる日本政府や日本企業へのサイバー攻撃でもわかる通り、「機密情報防衛」は「経済安全保障」、「的所有権保護」とも関連し、高度情報、知識社会において企業、国家にとっても最重要な課題である。

2013年11月2日ロンドンで開催されたサイバー空間に関する国際会議でサイバー犯罪を「経済、社会福祉に対する深刻な脅威」と認定し、政府間の信頼構築へ努力すること」を議長声明で確認した。

1996年には米国は有名な「経済スパイ法」(Economic Espionage Act=EEOA)を策定し、経済スパイへの重い罰則を導入した。一方、アングロサクソン諸国は1940年代からスパイ衛星を活用し、Echelon(梯子の隠語)盗聴システムを稼働させ、軍事情報のみでなく、経済情報も盗聴しているとして、欧州議会でも批判的になった。(『知識情報

戦略』24～25ページ)。インテリジェンス戦略に於いては、戦略確立のための Aggressive Intelligence (攻撃的情報) のみならず、防衛的情報 (Defensive Intelligence) の研究も重要である。

グローバル時代の経済競争は熾烈な情報戦でもあることを認識し、インテリジェンス、情報を最大限に活用する方策を研究することが肝要である。日本では情報機密保持がずさんで、ゆるく、日本はスパイ天国と見られている。過去、日立・三菱電機～IBM、富士通～AMDAL、ミノルタ～Honeywell。東芝機械の工作機械の対ソ輸出問題、CCI (クリーブランド医学研究所) でのアルツハイマーバイオ試薬事件など枚挙にいとまがないほどである。

東芝機械については高性能工作機械をソ連へ輸出したことで、ソ連潜水艦のプロペラの消音を実現し、追跡が困難となった。これは、共産圏向け輸出を規制しているココムに違反しているとして米国は東芝の米国向け輸出の1年間の禁止、米国主要新聞に謝罪広告の掲載を要求した。しかし、後日、ソ連潜水艦のプロペラの消音は東芝機械の輸出前から実現していたことが判明。東芝はあらぬ濡れ衣を着せられたのである。

CCIバイオ事件でも、域外管轄の日本人研究者を逮捕し、裁判にかけた。これは上記米国経済スパイ防止法 (EEA) の外国人に対する初の適用となった。しかし実情については不明な点があり、問題となっている。

先年、問題となった中国ファーウェイの副会長拘束、ファーウェイ通信機器が盗聴に使用される危険があるとして米国からの締め出し、半導体製造機器、先端半導体の中国向け輸出禁止など、かつての日本の自動車などの米国輸入規制など、1980年代をほうふつさせるものがある。

4. グローバルビジネスとビジネスインテリジェンス、競争情報

経済のグローバル化が急速に進み、国際ビジネス競争が激化し始めた。冷戦の崩壊で、世界の有効需要が10億人から30億人に拡大し、自由主義圏、旧共産圏の市場競争と国際ビジネス競争がし烈になり始めた。

1986年になると米国SCIP (Society of Competitive Intelligence Professionals= 競争情報専門家協会) がバージニアに元CIA諜報関係者などを中心に設立され、競争相手の情報収集の研究が始まった。かかる状況下、欧米では米英を中心に競争情報の研究が急速に進み、現在もSCIPは毎年、米国を中心に世界主要国で競争情報研究会を開催している。

以下ビジネスインテリジェンスを理論面から考究する。

1) ビジネスインテリジェンス情報理論 情報とは；

- ①情報、データ、
- ②インテリジェンス (付加価値情報) 情報の種類；

- ①公開情報 (40%)、
- ②私的情報 (60%)
- ③秘密情報 (約3%)

情報の特性；

与えても低減しない。(中川情報理論)

情報理論；

Herbert E. Meyer；

- ①情報レーダー理論
- ②情報製油所理論

Ben Gilad；

- ①情報濾過 (コーヒー濾過) 理論

中川 十郎；

- ①情報グルメ理論
- ②情報水力発電所理論
- ③情報3倍、3乗 (Triple) 理論 = 3倍蒐集、圧縮1・3理論

情報の活用；

- ①既存ビジネスの深化、拡大、新規
ビジネスの創出
- ②リスク。危機管理
- ③情報の機密保持

情報監査 (Intelligence Audit) 情報・情報源の評価、

情報の成果評価、cf (財務監査)

情報連鎖管理

(Intelligence Chain Management- [ICM])
一目標設定～戦略作成～情報収集、情報選別～情報源信頼性チェック～情報分析、～情報評価～情報配布～情報活用～情報監査～成果レビュー～新目標設定 (インテリジェンスサイクル) ～このサイクルを連鎖することによって、情報の質を高めていく。～(CIAの手法)

情報処理システム：

過去・現在・未来情報連鎖理論 (中川 PFFC理論)

過去の情報+現在の情報=未来予測

情報連鎖3C理論：

「関連付け」= Correlation、「結び付け」
≠ Combination、「協力」= Cooperation

情報の歴史；

農業時代＝

「土地」が権力の基盤～10,000年前

工業時代＝

「資本」が権力の基盤～300年前
(産業革命以降)

情報・知識時代＝

「情報・知識」が権力の基盤 (21世紀)

21世紀は情報・サービス、ソフト、データ、知識、AI (人工知能) が主導する時代となる。よって生涯教育、生涯学習、「リスクリング」が極めて重要となる。「一生勉強、一生青春」の精神が大切。

国際化、情報化時代の日本の戦略；

- ①情報、文化、創造性教育 (学校、企業、官庁、政府)
- ②国際語、Global Language 英語の教育が必須。(将来30億人が英語で交

流できる時代が来る。(ケンブリッジ大学 David Crystal 教授)

- ③国際問題に関心を持つこと。

- ④「情報化時代の今日、情報は毎日、世界中に氾濫しているが、インテリジェンス (付加価値の付けられた真に役立つ、価値ある情報) は砂漠の状態にある。」(Ben Gilad 元ラトガース大学准教授『グローバル時代の情報組織戦略』エルコ社 (中川十郎ほか訳))

- ⑤日々入手する情報を評価、分析し、付加価値をつけ、真に役立つ情報の活用法を学び、身につける努力を重ねることが、国際化、情報化、Chat GPT、AI 時代を生き抜くために最も重要な事である。

2) 情報収集・活用法

①情報収集源；

新聞、経済誌、経済情報誌、業界紙、TV、SNS、Internet、Blog、Chat GPT、Social Media、講習会、ZOOM参加、学会研究会、見本市、図書館、JETRO、官庁、地域会合、人的情報収集

- ②新聞情報では特に情報源、信憑性に注意し、関係情報の探索、2～3の情報源との比較、検証を心がけることが大切である。(情報監査が重要)

- ③上記公開情報源に加え、人的情報を加味し、情報を重層的に深め、分析し、活用すること。

- ④1週間、ひと月前の国内外のイベント、国際会議をモニターし、その対策を早めに打つこと。

- ⑤国内外のマクロの情報から、世界や国内の動向を読み解き、ミクロの対策、戦略、戦術を樹立すること。

- ⑥地図を逆さに見て、発想の転換を行い、普段と違った発想で、形にはまった日常性を打破する努力をし、斬新な発想と行動をとる。

例えば、日本中心の地図を欧州、アジア、米州、アフリカ、中近東、中央アジア、南米などを中心に据え、逆の立場から、地政学的に多層的、かつ複合的に情報を収集し、分析すること。

これは逆転の発想で、情報の客観性の確立、形にはまった日常性の打破に役立つ。

- ⑦攻撃的情報 (Aggressive Intelligence) をビジネスの確立、拡大に活用する。
- ⑧防御的情報 (Defensive Intelligence) はビジネスのリスク・危機管理、情報保全に活用する。
- ⑨人間の五感全てを活用、情報を収集。活用する。

眼 = 色彩情報、TV、PC、スマホ、Chat GPT、Internet、見本市、映画、演劇、読書などから情報を収集する。

口 = 話す、感情、情報提供、歌、食事、味情報を入手。

鼻 = におい、アロマ情報。耳 = 聞く、音声情報、TV、スマホ、研究会、会議 ETC。

手 = 感触、触れる、タイプする、書く、ピアノ、楽器演奏、表現～現代社会では『眼』偏重の情報収集が主である。

『目』の酷使。偏った五感の発達 = 情報社会の問題点

- ⑩人的情報 (Human Intelligence) の重要性 = 信頼できる人脈の確立が極めて重要である。情報感覚、情報センスを磨く努力が必要である。
- ⑪情報収集に関しては他人よりも3倍多く

人脈を構築し、他人よりも3倍多く情報を収集し、その情報を最大限に活用することが肝要である。

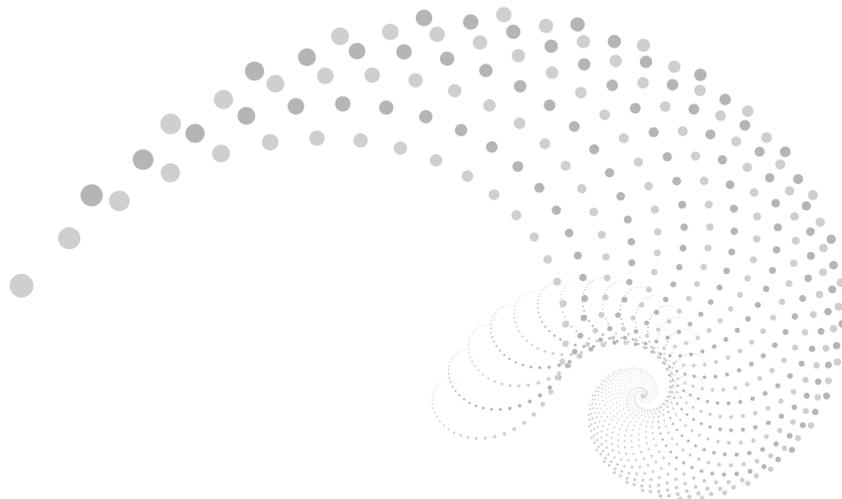
情報には ①公開情報、②人的・私的情報、③秘密情報があるが、ビジネスには人的・私的情報が極めて重要である。人的・私的情報収集には信頼できる人脈確立が必須である。そのためには人に信頼される己の人格陶冶がまず第一に重要であることを強調したい。

以上

- 1) 名古屋市立大学22世紀研究所特任教授、日本ビジネスインテリジェンス協会会長・理事長

- 2) 主要参考文献：

『知識情報戦略』石川昭・中川十郎編著、(税務経理協会) 2008年。『CIA流戦略情報読本』中川十郎ほか訳、(ダイヤモンド社) 1990。『グローバル企業の情報組織戦略』中川十郎ほか訳、(エルコ社) 1996年。『成功企業のIT戦略』、中川十郎他訳、(日経BP) 2003年、『国際経営戦略』中川十郎ほか共著 (同文館) 1996年、『日本が先進国から脱落する日』野口悠紀雄 (プレジデント社) 2022年、『2040年の日本』野口悠紀雄 (幻冬舎新書) 2023年、『捨てられる日本』ジム・ロジャース (SB新書) 2023年、『日本の絶望ランキング』大村大次郎 (中公新書ラクレ、2023年)



会員寄稿文

ハルビンとロシア

中 田 龍 彦

中国東北部最北端にあるのが黒龍江省である。黒龍江省の北側と西側はロシアである。黒龍江省の北側にはアムール川（黒龍江、全長4,368km 世界8位）、西部にウスーリー江（烏蘇里江、全長約897km）が流れている。黒龍江省の面積は45.48万km²（日本の総面積37万km²の1.2倍）、2022年の人口は3,099万人である。省都のハルビン市（中国語：哈尔滨市）は黒龍江省の政治・経済の中心であり、2022年の人口は939.5万人の大都市である。ハルビンの由来は、白鳥を意味する満洲語、平地を意味するモンゴル語、榮譽を意味する女真語などの諸説があり定まっていない。ハルビン市は黒龍江省の中央部、北流してアムール川に注ぐ松花江（詳細後述）の河畔に位置する。



ハルビンとロシア

ハルビンは美しい街である。筆者が同省の省都ハルビンを初めて訪問したのは1988年である。それ以来ニチメン及び双日の仕事の関係で約30年間に黒龍江省にかれこれ100回以上出張をした。

1898年（光緒24年）ロシア帝国により満洲を横断する東清鉄道建設が着手されると、交通の要衝として白系ロシア人を初めとする人口が急激に増加し経済の発展をみるようになった。街並みは現在でもロシア風の建物が多く存在する。ロシア人が多く住んでいたことから、新中国建国までの間に東方正教会の聖堂が多数建設された。聖ニコライ聖堂など文化大革命中に破壊されたものもあるが、聖ソフィア大聖堂（写真）（正式名称：生神女庇護聖堂、別名：聖母守護教堂、ウクライナ寺院）は教会として現存し、その建物は博物館として使われている。



聖ソフィア大聖堂



ライトアップされた夜の聖ソフィア大聖堂

ハルビンとロシア人については、函館日口交流史研究会の資料に以下紹介されている。

1898年～1917年までは、ロシアの普通の地方都市と同じ様にハルビンは発展し、初等教育機関から高等教育機関まで開設され、ロシアの行政機関の代表部が置かれた。1917年までに、ハルビンのロシア人人口は約7万人に達した。そして、1917年のロシア革命後、新しいロシアのハルビンの歴史、つまり、白系ロシア人のハルビンの歴史が始まった。当時中東鉄道総督であったホルワット将軍は、中東鉄道に共産主義者を入れないために、鉄道の管理権を中国側に譲った。

1917年～1924年は、ハルビンの白系ロシア人の歴史の第一期と言える。この時代の特徴は、白系ロシア人の増大である。彼らの多くが中東鉄道沿線に住んだ。1924年、中国のロシア人の人口は25万人を数えた。うち、ハルビンのロシア人は10万人に及んだ。1924年10月、中ソの話し合いの結果、中国は中東鉄道の管理権をソ連に返還し、中東鉄道の勤務者は、中国籍もしくはソ連国籍を有する者に限ることが法で定められた。その結果、ハルビンの白系ロシア人社会は、大きな打撃を受けることとなった。すなわち、ソ連国籍を取得したり、中国籍を取得する白系ロシア人が現れ始めたのである。

1932年～1945年までがハルビンの白系ロシア人の歴史の第二期である。この時期の特徴は、「満州国」が建設されたことである。「満州国」時代、白系ロシア人は少数民族に位置付けられた。

中東鉄道が「満州国」に売却された1935年以降、ソ連への帰還が始まった。帰還者の数は2万5千人に及んだ。他国へ移住した人達もいた。1930年、中国東北部のロシア人の内訳はソ連国籍者15万人、白系ロシア人10万人、中国国籍者1万5千人であったが、1934年には、ソ連国籍者11万人、白系ロシア人9万人、中国国籍者2万人となった。ハルビンだけでもロシア人は9万人にまで減少した。

そして1945年、白系ロシア人の歴史は終焉を迎えた。当時、白系ロシア人たちは冗談で、今後ABCの選択、つまり、オーストラリア (A)、ブラジル (B)、カザフスタンなどのソ連の開拓処女地 (C) (函館日口交史研究会倉田有佳注釈：ロシア語で「ツェリナー」) に行くという3つの選択が迫られると言ったそうである。こうして、70年に及ぶ、満州におけるロシア人の歴史は幕を閉じた。

中央大街と松花江：

ハルピンを訪れる旅行者が必ず足を運ぶのが中央大街と松花江である。

中央大街はハルピンを代表する歴史的な大通りで、ロシア統治時代は「中国人街」（ロシア語でキタイスカヤ）と呼ばれた。南北の直線の通りで全長1,450m/幅21.34m（内、車道の幅は10.8m）。南端は経緯街（十字街）、北端は松花江防洪記念塔と松花江に繋がっている。

中央大街にはロシア統治時代の建築物が数多く残され、「東方のパリ」とも称される西洋風の街並みが一直線に北の松花江に向かう。道の両側には欧州風建築物が建ち並び、その数は71棟。他に、ルネサンス式、バロック式、折衷式など中国でも珍しい多種多様な市指定建築物が13棟、保護建築は36棟ある。花崗岩で敷き詰められた道路は1924年に建設されたものである。現在中央通りは歩行者天国となり、その後の中国の都市の通りの手本となった。夜はライトアップされ、特に短い夏の夜は遅くまで多くの人で賑わう。また現在でもハルビン随一のショッピング街となっており、ロシア料理店や人気中華料理店、踊りが見られる北朝鮮国営レストランなどもある。

松花江は満州語で「スガリ・ウラー」と呼ばれ、「天の川」を意味する。松花江は南北二つの源がある。南の源流である第二松花江は長白山の主峰白頭山の天池に源を発する。北の源流である嫩江（のうこう）は大興安嶺の支脈伊勒呼里山の中段の南側に源を発する。嫩江と第二松花江が吉林省扶余県の三岔河あたりで合流した後、松花江と呼ばれ、吉林省吉林市、松原市、黒龍江省ハルビン市、ジャムスなどの中心部を流れている。ハルビン市内を流れる松花江は、街にも人々にとっても重要な役割を果たしてきた。冬になると凍り付いた川は市民の憩いの場となる。真冬の松花江には厚さおよそ50cmの氷が張り、その上を積もった雪をかき分けながら人や馬車が往来する。川幅はハルビン付近で約100m。防洪英雄記念碑の近くでは、スケート、駒回し、スノーモービル、氷上自転車、孔明灯（注1）などの遊具でたくさんの人が遊ぶ様子を見ることが出来る。

現在



中央大通り（旧キタイスカヤ街）



中央大通り

=ロシア統治時代=



キタイスカヤ街 出所:ライブドアブログ [tableau_in_mind](#)



中央大通り



黄昏時の夜の中央通り



ロシア人楽団が奏でるロシア民謡(中央大通りにて)



夜のハルビン市人民防洪勝利記念塔 (松花江川縁)



冬の松花江にて孔明灯を上げる人々
松花江は全て凍結、トラックも川上を走行可能

伊藤博文暗殺事件：

1909年10月26日午前9時過ぎ、長春から列車で到着したハルビン駅頭で枢密院議長伊藤博文が安重根（あんじゅうこん）（注2）に暗殺されている。この事件は伊藤がロシアの大蔵大臣ココフツォフと会談するためにハルビンを訪れた矢先に起きた。伊藤博文は2発の銃弾で致命傷を負い、同行していた田中清二郎満鉄理事は足に軽傷、川上ハルビン総領事は重症、森泰次郎宮内大臣秘書も軽傷を負った。ハルビン駅構内には安重根が発砲した場所、伊藤博文が被弾した場所に標識が残されている。その場で逮捕された安重根は、日本による朝鮮半島の蹂躪に抗してロシアに亡命していた30歳の青年で、裁判の後、1910年3月26日旅順で死刑となり、現在も埋葬地は不明である。



伊藤博文暗殺されたハルビン駅のホーム
出所：百度
安重根（写真の左下の標識の場所）から伊藤博文（右上標識の場所）を暗殺



安重根



伊藤博文枢密院議長
出所：百度

731部隊（石井部隊）：

小説家森村誠一の1980年代の著作『悪魔の飽食』を読まれた方も多いと思う。この本は第二次世界大戦中の「日本の人体実験」を告発する内容で、日本共産党中央機関紙「赤旗」で連載され、1981年11月に光文社から刊行。刊行翌年、続編『続・悪魔の飽食』とともに1982年の日本のベストセラーに数えられた本で、赤旗の記者下里正樹が共同作業者を務めた。筆者も何回かハルビン市平房区（ハルビン南方24km）にある731部隊跡を訪問する機会があった。1945年8月9日のソ連軍の満洲への侵攻直後、731部隊が証拠隠滅の為、731部隊の建物施設を大量の爆薬によって破壊したことから当時の建物施設は殆ど残っていない。

731部隊の正式名称は関東軍防疫給水部本部で、731部隊はその秘匿名称（通称号）である満洲第七三一部隊の略である。1941年3月に通称号が導入されるまでは、指揮官であった石井四郎中将（軍医、階級は終戦時）（注3）の苗字を取って石井部隊と通称された。731部隊は満洲に拠点を置き、兵士の感染症予防や、そのための衛生的な給水体制の研究を主任務とすると同時に、細菌戦に使用する生物兵器の研究・開発機関でもあった。平房地区の120万平方キロメートルを特別軍事区域にし、その中心地域の6.1平方キロメートルの敷地に3,000人余りの人々が細菌兵器の研究・開発・製造に従事していた。1940年当時、年間予算1,000万円（現在の90億円）が会計監査なしで支給されていた。731部隊は飛行場、神社、プールまである巨大な施設で、冷暖房完備の近代的施設をもち、被験者を収容する監獄まで備えていた。

問題は、人体実験の被験者は捕虜やスパイ容疑者やレジスタンスとして拘束された中国人・朝鮮人・ロシア人などで、「マルタ（丸太）」の隠語で呼称され、非人道的な人体実験を数多く行ったという事実である。731部隊は単に生物兵器の研究を行っていただけではなく、生物兵器を実戦で使用した。731部隊ではペストやチフスなどの各種の病原体の研究・培養、ノミなど攻撃目標を感染させるための媒介手段の研究が行われ、寧波、常德、浙贛（ズイガン）などで実際にペスト菌が散布された。

アメリカ合衆国による731部隊調査：

アメリカ合衆国は、日本の敗戦直後から4次にわたって細菌戦専門家による731部隊調査団を派遣し調査を行った。驚くべきことに「細菌兵器の研究成果を全面的に米国に提供すれば、石井などを戦犯には問わない」という取引が、米本国政府の承認の下に確定。調査団は人体実験に基づく細菌兵器の研究資料や、生体解剖によって得られた大量の標本などを米国に持ち帰った。石井中將や内藤良一中佐（軍医、石井中將の右腕）を始めとして、石井部隊の中樞を担った軍医や、731部隊に派遣され「マルタ」を虐殺していた研究者たちの多くは、戦後まったく罪を問われることなく、大学などの研究機関や企業の要職に着いた。内藤は自分の専門の



731部隊の全景 出所：Wikimedia Commons



731部隊1号棟 出所：Wikimedia Commons
左の写真の白丸部分が1号棟

凍結乾燥技術を生かして乾燥血漿を製造する「日本ブラッド・バンク」（後に「ミドリ十字」と改称）を設立。内藤も含め、創立当初の役員の半数は石井部隊の関係者であった。そして石井部隊に全面的に協力した医学界も、その過去を隠蔽することに成功したという暗黒の歴史がある。戦争とは如何に非人道的で且つ残酷なものかを思い知らされる場所が731部隊跡である。

ハルビンの味：

ハルビンに出張すると必ず食べるものが2つあった。その一つはロシア料理である。ハルビンのロシア料理では、中央大通りにある“華梅西餐厅”と“露西亞（ロシア）”の2つのレストランが非常に有名。華梅西餐厅で何時も注文する料理は、ロールキャベツ、ビーフストロガノフ、壺焼羊肉、ボルヒチ（紅葉湯）である。また同店の食パン（面包）も日本の物とは違うが、バター（黄油）とイクラ（紅魚子）と一緒に注文して食べる。ハルビン市民も沢山同店を訪れており何時も盛況である。露西亞のオーナーは中国の人だか奥さんは日本人と聞いている。小さな店だが小奇麗にしており、ロシア統治時代の写真が壁一面に張ってある。同店で美味しいのは、何と言ってもピロシキである。ハルビンを訪問するチャンスがあれば是非訪問して頂きたい。



華梅西餐厅のボルヒチ



筆者、華梅西餐厅にて



華梅西餐厅の店内



露西亞の名物 ピロシキ 出所:トリップアドバイザー



露西亞でのワンショット(友人と筆者、右側が筆者)

もう一つハルビンで美味しいのは餃子である。餃子と言っても日本の焼き餃子とは違い、全て水餃子（お湯で煮た水餃子）である。種類も非常に多く20種類位ある。のど越しがよく、口に入るとつるつと胃の中に入ってしまふ。水餃子を食べるときに欠かせないのが、ハルビンビール（ハルビンはビールの消費量が中国No.1の都市でもある）であり、この二つがあれば後は何もいらぬ。また値段も非常に安く、数人で数種類の水餃子をお腹一杯食べビールを沢山飲んでも合計で200元（=3,200円、@1中国元=16円）程度である。有名店は東方餃子王とい

うチェーン店である。聞くところによるとハルビン市と新潟市は姉妹都市であり、東方餃子王は新潟にも出店するとの噂があったが出店していないようである。

ハルビンの年間平均気温は夏と冬の温度差が非常に大きい顕著な大陸性気候である。1月の平均気温は -18.6°C と世界の大都市の中では最も寒い部類に入る。朝の最低気温は平均で -23.9°C にまで下がり、 -40 度以下まで下がることもあるが、非常に乾燥していて降雪はほとんどない。この寒さのため、ハルビンは氷の町と言われている。このため、中国の人との宴会で飲むお酒は白酒(注4)が主体となる。白酒はアルコール度数が25~55度のものがあり、飲み過ぎると腰が立たなくなる。くれぐれも注意を要する。



水餃子 出所:トリップアドバイザー



ハルピンビールと水餃子 出所:トリップアドバイザー

- 注1 孔明灯(こうめいとう): 天灯(てんとう)は中国やタイ王国などアジア各地域で広く見られる熱気球の一種である。紙と竹を用いて内部に光源を入れる構造から提灯の一種ともみなせる。伝承より孔明灯とも称される。当初は通信手段として使用されたが、後には節句における祈祷儀式の用具となっている。英語圏ではスカイランタン(英: Sky lantern)、チャイニーズランタン(英: Chinese lantern)とも呼ばれる。孔明灯の由来は、三国時代に諸葛亮が平陽で司馬懿の軍に包囲された際、紙を貼った大型の籠を製作し外部に救援を要請したのが発祥とされるが、本当のところは定かではない。
- 注2 安重根(あんじゅうこん、アンジュンゲン): 大韓帝国(1897年~1910年。略称、韓国)末期の愛国運動家。日韓協約によって保護国化進むなか、日本に抵抗する義兵闘争に加わって、朝鮮北部で戦っていたが、日本軍に圧迫され、1909年にロシアの沿海州に逃れ、その地を拠点になおも抵抗を続けていた。日本の韓国統監府初代統監だった伊藤博文のハルビン訪問を知り、1909年10月26日、ハルビン駅頭に於いて短銃3発で射殺した。その場で逮捕され、旅順に送られた後、裁判に付せられ、1910年3月死刑となった。現在韓国では抗日闘争の民族英雄として記念館などが建設されている。日本は前統監の暗殺を機に、朝鮮の抗日運動を抑えることを口実に、1910年8月22日、韓国併合条約を締結して韓国併合を行い、朝鮮の日本植民地化を完成させた。
- 注3 石井二郎: 1892 - 1959 (明治25 - 昭和34) 軍医。旧日本軍細菌戦の責任者。千葉県山武郡出身。今の山武郡芝山町にかつての加茂村の出身でその地域の大地主の四男として誕生。当時の日本人としては珍しく身長は六尺(180cm)を超えていた。1921年京都帝国大学医学部を首席で卒業後、陸軍軍医の道を選び、累進して45年軍医中將となる。京大大学院で細菌学、防疫学を専攻、軍医学校教官時代に細菌兵器の有効性を提唱。旧満州(中国東北地区)にて関東軍直轄の防疫班を創設し、1940年には関東軍防疫給水部(のち第731部隊)に発展し、みずから部隊長となり、一時期をのぞいて敗戦まで在任した。ここでの細菌兵器研究は、現地中国人、ロシア人、捕虜を連行、人体実験に使用、その数は数千人に及んだ。戦後、公職追放の対象者となったが、新宿区内で医院を開業、近隣の住民が怪我や病気になると無償で診療を行った。1959年(昭和34年)10月9日、喉頭癌のため国立東京第一病院で死去(67歳)。葬儀は月桂寺で行われ、葬儀委員長は北野政次(第2代・関東軍防疫給水部長)が務めた。
- 注4 白酒(バイジウ、慣用的にパイチュウとも): 中国発祥の蒸留酒。宋代に南方より伝わった蒸留酒を基礎として成立した。コーリヤン(高粱)、トウモロコシ、ジャガイモ、サツマイモなど穀物を原料とする。茅台酒(マオタイジウ)・汾酒(フェンジウ)などが該当する。状況に応じて、主原料から高粱酒(ガオリヤーンジウ)とも、製法から焼酒(シャオジウ)とも称される。一般にアルコール度数が高い。50度以上のものが多く、60度や65度というものも少なくない。本来のアルコール度数は50度以上であったが、嗜好の変化や海上輸送上の制限などから、1990年代から白酒のアルコール濃度を下げたものが広がってきて、今では低度酒と呼ばれる38度の白酒が主流となっている。50度以上であった高度酒も、現在は45度のものが出ている。中国駐在員や日本からの出張者もこの白酒攻撃で前後不覚になった例が少なくない。

会員寄稿文

地球全体の温暖化について

入 江 隆 史

自分の青春をかけた仕事果たして、世の為、人の為に貢献出来たのだろうか？と自問自答して思い悩む日もあります。それは私が会社に入社して配属されましたのは、合成樹脂本部でした。

最初はプラスチック原料を受発注する仕事から始まり、営業としては、新しく出来た包装資材部で、主にカップラーメンの外装として、熱をかけて収縮する透明のフィルムの販売やスナック菓子の包装等に使用されているアルミ箔と各種フィルムを張り合わせた包装資材などを販売していました。

また欧米から伝わって来た共押しフィルムというガス遮断性の高い樹脂を真ん中に上下に熱で袋状に加工出来たり、印刷したりする事が可能な樹脂と一緒に熱で溶融して押し出し、外見は1枚のフィルムとなる技術を導入して、単層の素材と比べ、千倍の酸素遮断性の高い技術と商品販売して来ました。

こうした素材を使って包装すると、肉や様々な食品の鮮度を保ち・日持ちを長くするものとなります。

また、1980年には、中国の深圳で1週間ほど開催されましたプラスチック包装の展示会に参加して中国の食品包装の近代化への努力をして来ました。

美味しく・日持ちを長くする素材を供給する事により社会に貢献出来る仕事をして来たつもりで、石油産業が「夢の素材」プラスチックを生み出し、大量生産・大量消費時代の様々な要望にプラスチック業界は応えたと思います。

然し、こうした包装資材は中身を消費し

たとたんにごみとなり、自然分解しない為に、いつまでも残り続けてしまいます。ガス遮断性の高い包装で食品の鮮度を保つ、レトルトの可能な食品包装、冷蔵庫に入れる為に使用するラップフィルムなどへの対応をして来ました。こうした包装資材のごみは、リサイクルも困難な状況で焼却するしかなく、そうするとCO₂による大気汚染や地球温暖化の原因となります。今後はこうした素材はなるべく使わずに、ごみをゼロにする生活が理想なのだろうと考えます。

温暖化によって異常高温が日常化すると干ばつが広がり、水が不足し食料が不足となり水や食料をめぐる紛争が起こります。また地球温暖化はグリーンランドはじめ北極、南極に近い所の多くの氷山が溶ける事により、この21世紀中に海面が最低でも26センチ、最高で98センチも上昇すると予測されています。陸地が消失すると気候難民が生まれ、それにより町のスラム化が起こります。

異常気象が常態化して台風・ハリケーンが巨大化し自然災害による水害が多発し気候難民が生まれて、その結果世界経済が衰退する事が予想されます。

世界全体でCO₂の年間放出量は330億トンで、このうち第1位の排出国は中国の100億トン（電力の60%が石炭火力発電）、第2位がアメリカの50億トン、第3位がインドで25億トン、第4位がロシアの15億トン、第5位が日本の11億トン、第6位がドイツの7億トンとなっており、日本は2050年までには、CO₂の排出を実質ゼロにするという宣言を世界にしています。

人類は18世紀後半に始まった産業革命以来、石炭・石油・天然ガスなどの化石燃料を燃やすようになりました。これらの比率は、自動車・合成樹脂・火力発電も含む石油が約40%、火力発電も含む石炭が32%、天然ガスが28%となっています。20世紀は石炭、石油の化石燃料の時代で、電力だけで見ると世界の電力需要に占める化石燃料・原子力の比率は72%で、水力が17%、風力が6%、太陽光を含むその他が5%で、まだ圧倒的にCO₂が発生する化石燃料によるものが主力となっています。

21世紀は各国がCO₂を排出しない脱炭素化を目指す地球にする事とされています。

太陽光、風力、地熱、潮力、中小水力発電などの非化石エネルギーの利用を目指し、特に本命は水素を使ったエネルギーの利用と言う事です。

原子力のような人類にとって、有害な電力は、すぐに撤退する事が必要とされています。欧米では既に原発等は撤退の動きをしていますが、世界で唯一の原子爆弾による被害国であり、又3.11の福島での原発事故は、有名なソ連のチェルノブイリと同様、世界でも有名な原発事故の場所です。

戦争での原爆による大きな被害と原発での大きな損害を二つも経験した日本が、2017年に国連で採択された「核兵器禁止条約」への批准という世界的な運動へ先頭に立って参加しているべきなのに、未だに未

加盟で参加しておらず、世界からも、どうしてかと不思議がられています。

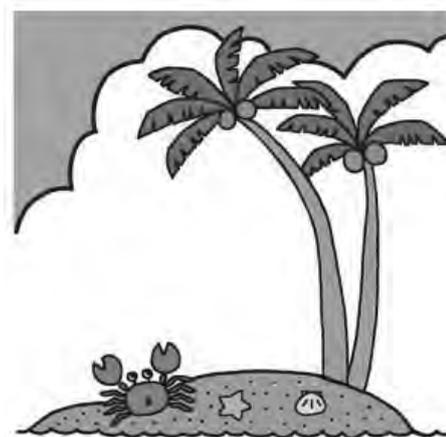
世界は、この原発事故をきっかけに脱原発にエネルギー政策の舵をきりました。ドイツやアメリカさえも脱原発に動いていますが、当事者である日本は、原発の再稼働に動いたり、逆にベトナムへの原発輸出に努めたり、国連の「核兵器禁止条約」に一貫して反対し続けて来ました。

日本は国土が狭く、地下資源が乏しいので、石油をはじめ沢山のエネルギー資源を輸入していますが、幸い日本は四方を海に囲まれていて水は豊富です。

この水を水素と酸素に分解し、水素を熱エネルギーに使える、環境には問題なく、全くCO₂を排出しない為に温暖化を防げます。

合わせてCO₂を沢山吸収する森林と海を守り育成し保護する事によって、これからの明るい未来を実現出来ると思います。こうした正しい方向性を一人ひとりが肝に銘じて、行動すべきだろうと思います。

自分のこれまでの努力は？と思い悩む日々もありましたが、大きな津波などでの災害が起こってから慌てるのではなく、我々の毎日の行動が、これから生きる人類の為に、正しい道を歩いているかを、この機会に常に冷静に、そして客観的に見て判断し行動すべき、とても大切な時代に入っている事を銘記すべきだと感じます。



会員寄稿文

♪ 89才、生きている限り歌い続けたい ♪

齋 富 造

会報 32号に「これからもずっと聴いて歌っていききたい名曲184曲」（癒しの曲）を寄稿した齋です。

昭和9年4月生れの仙台人、89才。昭和32年日綿実業入社。財務部、油脂課、仙台支店、鉄鋼本部、ニチメンステンレスセンター、セイビ等、定年迄お世話になりました。高校1年より音楽に目覚めて以来11の合唱団で74年間、休まず歌い続け、現在は3つのコーラスで歌っております。

先ず「あさひ歌声サークル」。男声合唱団フロイデの同僚の高見沢先生指揮。私が住んでいる柏市旭町近隣センターで隔週火曜日、近所の奥様方40人が中心となり、季節に合わせて、まっかな秋、この広い野原いっぱい、野ばら、冬景色等を2部合唱で練習。9～11月の敬老会やセンター祭りで披露しています。

次に「平和の旅へ合唱団」。二期会々員のソプラノ歌手、奥野真理子先生指揮。千葉、埼玉、茨城、東京から反戦・平和を願っているメンバー60数名が柏に集まり日曜午後から平和の歌、折り鶴、群青、青い空は、ケサラ等を練習。9月の平和講演会、10月の高齢者集い、12月のおおたかの森ホールでの演奏会等々で発表を続けております。

3つ目は「混声合唱団フォンテ」。流山の、いや今では日本のカラヤン？こと唐沢昌伸先生の厳しくもユーモア溢れる指揮のもと合唱好きの男女40名が毎土曜夕方から夜遅くまで猛練習。掲載の写真は今年7月おおたかの森ホールでの第47回定演の様。

前列右から2人目が私です。フォーレのレクイエム、蔵王、水のいのち等を歌いました。



2023年7月30日の定期演奏会の模様
向かって前列右より二人目が私です

来年7月は流山文化会館ホールで第48回定演を予定。ヴィヴァルディのグローリア・ミサ、バードの5声のミサ、團伊玖磨の筑後川等の練習を早速始めました。

お固い事ばかりではなく時々先生のご自宅で、集まれる人が歌いたい楽譜や飲みたいお酒を持ち寄ってサロン風に暖かく楽しいひと時を過ごすことが出来るのもカラヤン先生の人柄で、「がんじがらめでは、皆がくたびれてしまうよ」が先生の口癖でもありフォンテの大きな魅力でもあるのです。



カラヤン先生のご自宅での飲み会での私

ていた通信機器は、私もその十数年後に社会人になってから使用したものであり、海外との時差にもどかしさと、反面有難さを感じ乍ら仕事をしたことなど思い出しながら読みました。また、当時はまだ子供であった私ですが聞き覚えのある話しも書かれており大変懐かしく、時代を遡り、数々の思い出がよみがえりました。皆さまの中にも、海外駐在されて、どこか父と重なるようなご体験をされた方々もいらっしゃるのではないかなと想像しまして、こちらに投稿することにいたしました。世界中どこでも即時に繋がり便利でもあり、忙しく過ぎていく今の時代ですが、ああ、こんな時代もあったな、或いは、そうか、そんな時代だったんだな、などとちょっと立ち止まって懐かしく思っただけならば幸いです。(投稿文内の画像は、父のアルバムより抜粋し挿入しました)

海外アチコチ =駐在員の一日=

ーブラジル便りー

サンパウロ 日野 起男

ポンカンの初物が朝食に



故郷のご両親様、久しくご無沙汰の段、おわび申します。お達者ですか。今日はひとつ、ここサンパウロでのわたしたちの元気な生活をお話いたしまししょう。ブラジルボ

ケか、忘れっぽくなったので、今日のあれこれを中心にな。

そうそう、昨年末、家族帰日のおりには大変お世話になりました。宝塚の家族寮の

住み心地は上々だと便りをよこしています。

わたしもこちらで社宅暮らし、桑名副支配人と二人暮らしですが、よく気をつくお手伝いさんがいて、不自由はありません。当地では朝食はごく軽く、コーヒーと卵、くだもの。今朝はポンカンの初物が出ました。このポンカンも日本の移民さんたちが育てたくだものの一つで、他に富有柿、いちごと枚挙にいとまがありません。

出勤は社用車で。海外駐在ならではのぜいたくです。車には交通安全祈願の大きな成田さんのお守りがぶら下がっています。本社の親心です。それにしても、この通勤途次のこの町の事故の多いこと。毎朝何か目撃します。それに道路の混みよう十五分のところが四十五分もかかります。現在、ダイナミックに建設されている高架道路と、当国最初の地下鉄が市民の待望です。車の中ではカーラジオをつけっ放してブラジル、ポルトガル語の耳学問。また目にはいるタバコの広告であれ、乾物屋の看板であれ、みな語学の教科書がわりです。



送電用鉄塔の大口商いを

今朝の仕事も、入電テレックスの整理から始まりました。うまいもので、ブラジルと日本の時差はキッカリ十二時間です。日本の午後八時が当地の午前八時です。その意味で伯国と日本でこれと狙った商いを不眠不休で追求しているともいえましよう。

電報のひとつは、ごく最近サンパウロ州電力局むけにわが社が契約調印した送電用鉄塔の大口商い関係。さっそくテレックスを受信から発信に切り換え、ワシントンに出張中の担当者に転電。

お父さん、二、三年前世界でも最大級の発電所のこと、お便りしたことありましたね。ブラジルの内陸を大迂回してアルゼンチンのラ・プラッタ河に注ぐリオ・パラナ川。その水量をエネルギーとするイーリャ・ソルティラ水力発電所のこと。あの時の発電機器商いの成功が、今、その送電鉄塔の成約に結び付いたのです。

さて、私の主な担当は経理と総務です。女房役です。献立の心配こそしませんが、いったい君の仕事は何だと問われても、指を折って数えられない種の仕事です。決してハデではありませんが、会社の経営に直結した大切な仕事です。

ブラジルの南伯綿花の商いも、今収穫の晩秋を迎えて（日本は若葉ですね）正に佳境にはいりました。受け渡しの大黒板には船積みのスケジュールがつぎつぎと書き込まれていきます。精綿玉の売手、買手。船会社、乙仲。乗客が今日も絶えませんでした。おかげで六杯のカフェジーニョ（小さなカップのコーヒー）を付き合ってしまった、と昼食前に桑名さんはゲップです。

水曜と土曜には昼食で元気をつける

今日は水曜。土曜とこの水曜はブラジル人が昼食で元気をつける日です。すなわちフェジョワダをたらふく食べる日。これは当地のご馳走の代表選手ですが、豚の耳鼻喉口、尻尾とあらゆる臓物を黒豆でグツグツ塩味に煮込んだものです。これを油ご飯にまぶして食べる。素焼きの壺のまま供されるのですが、これがブクブク溶岩のように煮え立っていないとダメです。なんでもアフリカ土人の料理だとか、農業奴隷が発明（？）したものだとか言われていますが、慣れるとおいしいものですよ。

午後二時。リオ・デ・ジャネイロ市へ出張の佐久間君より長距離電話。米国産小麦の対伯輸入、三国間商い。何と落札。大口です。受話器を握る桑名さんの顔を見れば



わかります。不思議な話ですが、国土面積は日本の二十二倍強にして人口は日本より若干下回るこの農業大国ブラジルは（今、工業でも南米の日本を目指しています）、小麦をいまだ主要輸入品リストの上位に余儀なくされているのです。東京本社、ニューヨーク日綿とトリオを組んでの本日の入札。初参加で見事落札。朝霧で飛行機が出ないと入札に遅刻するからと、昨夜真夜中のバスで佐久間君は出張したのでした。それにしても、何と落札者発表の手際の良さ。パンのことですからね。

興奮さめやらぬまま午後の執務です。いつものことながら。時計が二時をさした途端、ジャンジャン電話がかかってきます。銀行あり、得意先あり。日本語あり、ブラジル・ポルトガル語ありです。えらいもので、最近では電話のジャンを聞いただけで、だれが何の用件でなどと頭にピンと来、それならこう応答しようと、瞬間、策をたてながら「アロー（もしもし）」と受話器をとる。ときには正にドンピシャリと勘が当たったりします。



ブラジル製、虎屋の羊かんも

退社の定刻は六時ですが、わたしたちはどうしても二、三時間遅くなります。今日一日の成果、経過が架電の原稿となり、副支配人の添削、これをテレックスにたたき込む。発電はサンフランシスコ店の仲介で、世界の日綿各店に流してもらいます。このテレックスの読取針がテープの点字を快調に追って、長電文を読みとってゆく音は、疲れた耳に一種の音楽でさえあります。今日のテープは当店に着任一か月そここの坂上君が慣れない手つきで、一生懸命にたたいたものですが、どうしてどうして、殆どミスがない。着任早々、全てが本番です。今日は小麦のこと、新綿、初の船積み案内電。珍しく全てが明るいメッセージ。こんな時は少々遅くなっても、疲れた気持ちがしないものです。

九時、本日の仕事納め。車が来るまで街角のバル（立ち飲み、立ち食いの何でも屋）でセルベージャ（ビール）の乾杯。今日は皆、大ジョッキをあげました。

お母さん、今日の社宅の夕ご飯、お教えしましょうか。いわしとサツマイモの揚げ物、それにコンニャク、里芋、大根、ちくわの関東煮です。こちらの里いもも柔らかかく、日本と同じ味ですよ。それに、醤油だって味噌だってブラジル製。食後のお茶には虎屋の羊羹。これもブラジルの小豆で作った、ブラジルの羊羹です。



二階の部屋でこの手紙を書いていますと、階下で電話の鳴る音。桑名さんのアテンドする声が大きく響いてきます。例によって、奥地の日綿オンダベルデ精綿工場長の大西君からの長距離電話です。農家との実綿の値決めが微妙な時期に入っているのです。こちらからも明朝早々のT紡績への出荷のことなど、緊急指示されています。



ご両親様。本社からの内命もあり、わたしも間もなく帰任です。今年のお盆は日本です。その時ゆっくりお話ししましょう。つもる話は十年分たっぷりたまっています。それでは、くれぐれもご自愛のほどを。



会員寄稿文

製 綿 工 場 便 り

日 野 起 男

これは、1960年代、父がブラジルに赴任していた時代のことを本人が綴ったものです。今回の会報で紹介させていただいております「日綿実業 社内報」の投稿文より想像していただけるかと思ひ、こちらの掲載もお願いいたしました。ブラジル国サンパウロ州奥地の或る田舎町でもニチメンのプロジェクトが町の人々の生活に大きく関わり潤いを与えた時代、歴史の1ページに刻まれた時代へちょっと出かけるつもりで読んでいただければ幸いです。

日 野 育 子



町の名をタケアリチンガという。先住民のインディオの言葉で「竹の茂った処」の意という。サンパウロ市から内陸へ四百軒、三十歳代の後半を、私はこの町で勤務した。

製綿工程の詳細は省くが「風と共に去りぬ」のブラジル版といった風景の、奥地綿作地帯での実綿買い付けから仕事は始まる。実綿は工場へ運ばれ、空気の圧力で製綿機械の内部へ送り込まれる。綿は円盤状の丸鋸が何百枚もフル回転する歯の表面を渡ることになる。此の工程で、綿の繊維だけが掻きとられ、種はポトポトと下のベルト・コンベアーに落下する。繊維は二百匁の精棉俵となって、日本の紡績工場



に輸出された。

当時の日本の紡績は最盛期にあった。バレーボールもそうだった。日紡貝塚の東洋の魔女がブラジルにも来た。ブラジルは歯がたたない。魔女は紅白にわかれ、試合を見せ、回転レシーブを披露した。映りのわるい事務所のテレビであったが、連中を唸らせたものだ。

綿の季節は2月から6月、収穫の秋だ。俄かに町は活気づく。連日のごとく、遠くは300軒もの奥地から、ジュートの実綿袋を満載したトラックが50台も100台も、この町に入って来る。住宅の前であれ、真夜中の刻であれ、街路という街路に横付けして荷下ろしの順番を待つ。

日当たりの良い北向きの緩やかな大斜面に展けたこの町は、この時期、完全に綿花に占拠されてしまう。だが、誰も文句を言わない。銀行も、飲食店も、郊外の駅の駅長も、教会の神父でさえ、このところ愛想がよい。綿花の現金が街に廻り始めたのだ。

トラックの実綿袋を荷下ろしする現場は、

殊に活気にあふれていた。チョコレート色の肌をした若者たちは、これを待っていたのだ。現金にありつけるこのシーズンを。麻布一枚を腰に巻いて、汗を光らせてよく働いた。重い袋を頭に載いて、細い廊下を実綿の格納庫へ小走りするのであった。



それでいて、私たちに姿が目に入ると真っ白い歯で笑ってみせ、片手を挙げて挨拶をした。

土曜は週の給料日だ。日が西に傾いたころ、花柄のワンピースにちょっと肌をかくしてみせた娘たちが、工場の煉瓦塀のかげに屯しはじめる。ぺちゃぺちゃとよく喋れるものだ。彼氏が荷下ろしの労働を終え、ポケットを膨らませて、裏の門から出てくるのをこうして待っているのだ。

若さに溢れた町であった。いい老人も沢山いた。ジョゼがその一人だ。自分は奴隷の子で、母はインディオの血をひくという。ジョゼは工場の夜番であった。40年もこれをやっているという。工場の持ち主が次々と代わっても、この工場に仕えてきたという。

ジョゼは小柄で、肌は干し柿色であった。日本の郷里の「あの爺さんに似ているな」といった感じだった。ジョゼは博識であった。私が工場を取り巻く人々のことやらを知りたくて尋ねると、何でも教えてくれた。

「セニョール・イノ」私に話すとき、ジョゼはそう呼びかける。幾晩も話すうちに、「セウ・イノ」になった。「様」が「さん」になった感じ。「イノ」は「ヒノ」だ。ポルトガル語はHを発音しない。発音できない舌になってしまっている。

ある日「セウ・イノ」と呼びかけてきた。事務所の、ちょっと床を底上げした私の部屋の私の「机の上を見よ」という。入り口の階段を背に外を向いて話をしているのだが、振り向いて机を見る。机の背後の「壁を見よ」という。「二つのピストルの弾の跡に気づいているか」と言う。漆喰が剥がれ

た形で、硬貨ほど赤い煉瓦がのぞいている。ジョゼは話を続ける。

「かなり昔だが、綿のお客が、事務所で言い争っていた。ブーツで床を蹴り、ここを出ていこうとして、いきなり振り返り、二発やったのよ！ エリアスに。当たりはしなかったがね」。

エリアスはこの工場の前持ち主だ。トルコ人で、阿漕なことも相当やり、人を泣かせたという。

工場を一巡して戻ってきたジョゼは「セウ・イノ」と呼びかけて、わたしを街路の高みの展望のきくところへ連れ出した。町のはずれに連なる、なだらかな丘陵のシルエットを指さす。実綿倉庫に納まりきらない綿の袋は、あの丘陵に野積みされて小さなピラミッドをなしている。ユーカリの大樹も四、五本立っている。丘もピラミッドもユーカリも、日没の今は黒いシルエットだ。その、一等高いユーカリの上に、人工衛星が現れるという。将にこの時刻に。

「そら、出てきた。見えるだろ。サティリティ（衛星）よ」。ばらばらと音をたてて、降り零れてくるような満天の星空を縫って、ジョゼ爺さんの衛星は、その水平航路を保ち乍ら、ゆっくりと渡っていくのであった。

ことごとと、工場からもれてくる機械の

単調律に、タケアリチンガの夜は、いやがうえにも更けていく。



(2008年ニチメン大阪社友会会報第2号に掲載)

会員寄稿文

清朝最後の王女 愛新覚羅顥琦

中 田 龍 彦

愛新覚羅（あいしんかくら）という名前をお聞きになったことがあると思う。中国の近代史と現代に繋がる重要な清朝王族が愛新覚羅である。清朝最後の皇帝(ラストエンペラー)となったのが、大清帝国第12代皇帝となった溥儀である。溥儀の正式な名前は愛新覚羅溥儀、その実弟が愛新覚羅溥傑である。溥傑の王妃は侯爵嵯峨家（公家華族）の長女の嵯峨浩（さがひろ）で、流転の王女として有名である。溥傑と浩の長女の慧生（えいせい）は、天城山心中で死亡した女性として知られる。

今回は、溥儀や溥傑の話ではなく、最後の生存王女であった愛新覚羅顥琦（あいしんかくら けんき、以下「顥琦」）についてご紹介したいと思う。

1990年頃だと記憶しているが、実は筆者はこの顥琦に北京で一度お会いしたことがある。筆者は北京駐在時代の上司の松村さん・濱本さんから、今晚、愛新覚羅顥琦と一緒に食事することになっているから、来るかとお誘いがあり、北京市内にある首都飯店の日本料理店で食事をした。当時は、顥琦が愛新覚羅の一族の末裔であるとお聞きしていたが、顥琦がどのような人生を歩んで来たか、恥ずかしながらよく知らなかった。会食時に顥琦の日本留学時代の話が出、小坂旦子さん（詳細後述）との思いで話をされていた。それから数十年立ち、最近、彼女の自伝である「清朝最後の王女に生まれて-日中のはざままで」（中央文庫刊、1990年4月10日初版発行）を読んで、今更ながら顥琦の壮絶且つ劇的な半生について再認識したので、以下顥琦の辿った半生についてお話したいと思う。



愛新覚羅顥琦（清朝王族姿）
出所：百度



愛新覚羅顥琦（子供時代）
出所：百度



晩年の愛新覚羅顥琦
出所：百度

愛新覚羅顥琦（中国名：金 黙玉）

愛新覚羅顥琦（1918年9月14日 - 2014年5月26日）は、清朝八大親王の一人、第10代肅親王愛新覚羅善耆（あいしんかくらぜんき）の末娘（第十七女）として旅順に生まれた人物である。肅親王一家は清王朝滅亡を機に北京から旅順に亡命、その後、天津郊外に在住。最後の生存王女であった。旧字体では愛新覚羅顥琦（簡体字：爱新觉罗显琦、拼音：Àixīnjuéluó Xiǎnqí（アイシンジュエルオ・シエンチー）。中国名は金 黙玉である。

1918年（大正7年）9月14日、第四側室の末子（第17女）として旅順（現在の遼寧省大連市）で生まれる。同側室が生んだ子は男王6人、女王3人で、母を同じくする2人の姉の1人が、第十四王女「男装の麗人」「東洋のマタ=ハリ」こと川島芳子であった。父の肅親王は、1922年（大正11年）3月15日に旅順で死去している。顕琦の両親は彼女が4歳のときに亡くなり、彼女は主に異母姉妹によって育てられた。昭和の初期に男装の麗人として有名で関東軍の手先となったとされる川島芳子本名は愛新覚羅顯琦（あいしんかくらけんし、中国名は金璧輝）は同腹の4番目である。川島芳子は大正2年（1913年）、川島浪速（かわしまなにわ）の養女となり来日。昭和の初め、清朝の再興を画策し上海に渡り、日本軍の工作員として諜報活動に協力。日本敗戦後、中国で逮捕され漢奸（中国を裏切った人物）として銃殺された。



川島芳子（本名：愛新覚羅顯琦）
出所：ウィキメディア



愛新覚羅顯琦と馬万里と結婚
出所：百度

顯琦は旅順博物館や旅順ヤマトホテル近くにある旅順高等女学校に入学、長春高等女学校への転校を経て、女子学習院（現・学習院女子高等科）へ留学する。同学卒業後の1940年（昭和15年）、日本女子大学英語科へ進学する。翌1941年（昭和16年）、日中戦争が激しくなったため帰国。1945年（昭和20年）に第二次世界大戦が終結、1949年（昭和24年）10月1日に中華人民共和国が建国された。

顯琦は北京で兄の子どもたちの面倒を見ながら四川料理屋を経営、この頃に画家であった馬万里と結婚。1956年（昭和31年）、周恩来の肝入りで設立された北京編訳社の日文組に入社、翻訳関係の業務を行う。1958年（昭和33年）2月、イデオロギー闘争に巻き込まれ右派勢力として密告により逮捕され、判決が出るまで6年間も拘束される。刑務所に行く前に夫の関与を避けるため離婚。顯琦はその後15年の獄中生活。さらに文化大革命で天津の農場で7年間の強制労働に従事、この間に施有為と再婚した。

鄧小平に肉体労働ではない仕事を与えるよう頼む手紙を送って身分を回復、北京の文史研究館で職を得て北京に移り住んだ。然しながら、長年監獄に収監されていたこと、前職の北京編訳社が消滅していたこと等から、北京で住む家が無かった為、この頃は友人の家に間借りをしていた。顯琦は思い切ってその頃登場した趙紫陽総理に手紙を書き、北京市から2DKの分配を受け、やっと人並みの生活が送れるようになった。

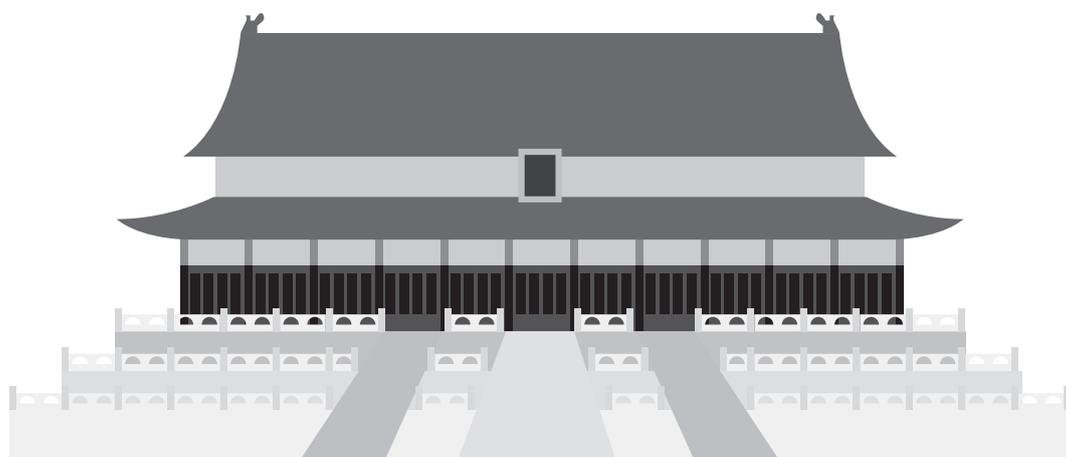
顕琦は自分がこのような数奇な人生を歩むことになったのは、清朝の王女に生まれたこと、実姉が漢奸として日本のスパイとして銃殺されたこと、更に旅順・長春・東京と一貫して日本の教育を受けたことから、中国人でありながら中国のことを余り知らなかったからだ述べている。

一方、1996年に日本政府の支援で河北省に日本語学校を設立、日本各地を訪問し、講演活動等を通じて日本語教育へ力を注ぐ。2014年（平成26年）5月26日、北京の病院で死去。95歳没。死の数ヶ月前から入院していた。

1986年（昭和61年）11月に日本で出版された『清朝の王女に生れて-日中のはざままで』は、顕琦が自らが日本語で書いた自伝本である。故郷、旅順や実姉の川島芳子の思い出、女子学習院への留学から日中戦争後の北京での生活、そして文革期15年の投獄生活、その後7年間農村での強制労働などが書かれている。1990年（平成2年）4月に文庫化、2002年には中公文庫新版が出版されている。著書の中でも恨みや批判的なことは書かれておらず、本人は4年制の大学へ3つ通わせてもらったと語っている。

1982年旧友の小坂旦子さん（こさかあさこ：三井家の出身、小坂徳三郎＝信越化学社長・会長、衆議院議員、運輸大臣の妻）、福岡百合子さん、武久恭子さんの計らいで女子学習院の同窓会に招かれ、四十数年振りに震えるほどの喜びで日本を訪問、同窓会で沢山の友達からやさしい言葉と誠に細やかな心配りに包まれアッという間に滞在期間の20日が過ぎたと顕琦は述べている。その時に小坂旦子さんの勧めで自伝のようなものを書いたらと言われたこと、後年、川島芳子について北京に取材に来た上坂冬子からの後押しもあり、自伝を書き、原稿を上坂冬子に郵送、それを上坂冬子が中央公論社に回して自伝が発刊された。

太平洋戦争前、実姉・川島芳子を「男装の麗人」として舞台化、初代水谷八重子が主演を、顕琦は東京・有楽町で観ている。自伝に「あらお姉さまにそっくりね」と当時の感想を述べている。中学時代の新京（現、吉林省長春市）や高校時代の東京・世田谷で、芳子のお見合いで会った時のエピソードも紹介されている。川島芳子が結婚式を挙げた旅順ヤマトホテルでの結婚式に顕琦は参加したこと、また、戦後モルヒネ中毒になった芳子の様子も同書の冒頭で紹介している。近代中国の表と裏を知ることが出来るこの1冊、是非ご一読願いたい。



第8回ニチメン・シカゴ会 4年振りに開催

保 科 孝

5月20日（土）、東京青山の青山学院大学アイヴィーホールで第8回ニチメン・シカゴ会が開催されました。

2020年春のコロナの感染拡大以降延期のご案内を重ね、その間にアイヴィーホールもコロナの影響もあり、これまでの会場の建物の閉鎖などがありました。今年に入り改修工事も終わり衣替えされたアイヴィーホールでの開催となりました。

今回は76名の方のご案内、関西など遠方よりのご参加6名、また前回に続きご夫婦での参加3組で最終30名出席の会となりました。その様子を当日の写真を含めて以下ご報告致します。

会は12時から藤井敬三さんの司会進行で、初めにこの四年間の物故者、亀田昭様、小橋雅寛様、嶋谷弘一様、辻井準一様、片岡脩様、松尾健様に対する黙祷が行われご逝去を悼みました。次に世話人代表として米田信一さんのご挨拶。一回目の赴任は1967年、アルカポネで怖いイメージの残るシカゴで、現地給与も安かったが（とはいえ当時の初任給の3倍）よく働き、当時はチャイナ商い（スーパーへの陶器販売）に助けられた。ゴルフも、空港に迎えに来られた杉本さん、田中さんにプロショップに連れて行かれ、クラブセットを有無を言わず購入させられといった具合でよくやった。その後90年代に支店長で赴任時は、フォード向けの商売が米国ニチメンの中での稼ぎ頭で、ニューヨークの本部から決算時に大いに貢献を求められたといったお話など、往時の活力溢れるシカゴ支店のお話を頂きました。次に松井靖治さん（名古屋物資から駐在、米田さんのお話にあったチャイナを欧米で拡販）が今回名古屋から第1回開催以来のご参加で、少し耳が遠いと言いながら、元気のよいご発声により乾杯。前回に続きご夫人の参加で、米田夫人より米田さんの挨拶中に”巻き“が入り笑いを誘うなど、和やかな第8回シカゴ会のスタートとなりました。

しばし歓談の時間をさみスピーチコーナーが始まりました。神戸からの遠来で最高齢（88歳）の吉本邦晴さんより、既に鬼籍に入られた歴代のシカゴ支店長との親交について、また米田さんとは90年代当時シカゴとニューヨーク本部との関係で米国ニチメンとして大変助かったことなどご披露頂き、宝塚から遠来の渡邊康さんからは、毎年参加のお誘いの中（実は筆者の宝塚時代シカゴ帰りの渡邊さんご夫妻とも親交があり）、実現できなかったが、今年は久々に参加出来た、また次回も参加できるように、とのお話を頂きました。続いて初参加者として酒井俊行さん（参加最年少54歳）で、現在はソニー勤務、同様に初参加の関根和彦さんからは、ニチメンR&Dデトロイト出張所で、本日出席の小蒲さん、砂子さん等が上司で大変お世話になったことなど、お話頂きました。

次は御夫妻参加のスピーチコーナーで、第6回時は4組のご夫妻に登壇頂いて全員スピーチで大変盛り上がりしましたが、第7回目からはご主人の介添えなしでとのご希望から今回もご夫人の参加者、米田夫人、安井夫人、藤井夫人に登壇頂き、自己紹介のスピーチを頂きました。藤井夫人からは、シカゴ赴任前のデュッセルドルフ駐在時に現地でも2人のお子様を出産され、その際に池永さん（本日参加）、北野さんに大変お世話になったこと、その後シカゴでお世話になった安井さん、藤久保さんにもお会い出来たと、喜びのスピーチを頂きました。ご夫人方にとっては駐在ならではの家族ぐるみのお付き合いからの懐かしい再会の場となったようです。今後もより多くのご夫婦お揃いでのご参加を頂く事が出来ればと思ったところでした。

次に、実は遠来がもう1人と分かり、岩本真二さんから現状大阪単身赴任中のところ、奥様が大阪に来られる環境となったこと（大事な愛犬が亡くなったこともあり）元々出身の大阪人に戻りそう（何かハッピーでなさそうな）とのスピーチを、次に毎回ご出席頂いている広本昌也さん、司会者藤井さんのご指名で同期の浦野由紀夫さんから夫々駐在時の仕事関係の事などエピソードをご披露頂きました。今回は会場の関係で14時半までと時間のゆとりもあり、スピーチコーナーでは大勢の方々にスピーチを頂き、皆さんと楽しい時間を共有することが出来ました。

その後、歓談のあと、中締めは北野廣道さんで、大阪自動車出身で機械を担当されたことなどお話の後、元気よく一本で締めて頂きました。恒例の総括、次回のご案内では世話人代表の五月女穰さんより、今回奥様が足の具合で前日に出席回避されたこと、またご本人が医者からはあと4年は大丈夫と言われている(?)ので、今後4年間は参加できる見込みといつもながらウィットの効いたスピーチと、最後に次回令和6年5月25日開催のご案内、続いて若手世話人(60、70歳でも若手?)全員の顔見せ登壇を促され、受付及び写真を担当頂いた藤久保俊三さん、司会を担当頂いた藤井敬三さん、そして皆さんとの連絡役担当の筆者が一言ずつご挨拶。筆者からは世話人代表の田中長典さん(膝の具合で残念ながら今回欠席された)からのメッセージを前日にメール添付でお送りしていたので、そこに託された、引退後65歳からの10年、15年が人生でその人と奥様にとって一番充実した時間かもしれない、「それを意識頂く契機になればとの、84歳になっての思い」をお伝えし、最後に司会の藤井さんより閉会が宣され、恒例の二次会をご案内(同じアイヴィーホールの1階個室)しましたが、二次会には24名と大勢のご参加を頂き、お茶とお酒で1時間半超の二次会となり楽しい会を締めくくりました。

シカゴ会のメンバーは比較的若手が多くまだ現役として多方面で活躍中です。今回も出席の約三分の二が戦後生まれで、活力と元氣を得られる会とも言われております。

今年も、そこに活力あふれるご夫人のご参加を頂き、華やぎのある会となりました。御夫妻で参加頂きました米田御夫妻、安井御夫妻、藤井御夫妻に紙面をお借りして改めて御礼申し上げます。

またシカゴ会は、シカゴ駐在のニチメン社員だけではなく、メーカーの駐在員でニチメン・シカゴに駐在されていた方、また第3回の会からシカゴ支店にゆかりのある方にも広くお声掛けして参加頂いております。次回は第9回となりますが、場所及び時間は以下の通り開催を予定しております。シカゴの駐在員のみならず、ゆかりのある方も是非奥様御同伴でご参加下さい。

第9回ニチメン・シカゴ会

日時：2024年5月25日(土曜日) 11時半集合、12時開会

場所：東京青山 アイヴィーホール 3F シノノメ

シカゴ会連絡先：保科孝 (oshina_t@ab.cyberhome.ne.jp)

携帯：090-9059-0043



後列：関根和彦、大島教義、小蒲智臣、米田夫人、渡辺康、伊東鉄真、山内直之、砂子和久
前列：影山雄司、松井靖治、米田信一、吉本邦晴、五月女穰、廣本昌也、池永浩、北野廣道



後列：岩本真二、酒井俊行、藤久保俊三、藤井敬三、保科孝
前列：金井湧二、浦野由紀夫、日置光昭、安井修司、安井夫人、藤井夫人、鈴木淳一、嘉瀬正彦



世話人代表挨拶 米田信一



令夫人登壇



浦野由紀夫



乾杯ご発声 松井靖冶



米田夫人



中締め 北野廣道



最高齢 吉本邦晴



安井夫人



世話人総括 五月女穰



遠来 渡辺康



藤井夫人



司会 藤井敬三



初参加 酒井俊行



遠来 岩本真二



筆者 保科孝



初参加 関根和彦



廣本昌也

第33回 如月会(ニチメン経理部OB会)開催報告

浅利真司

6月24日(土)東京表参道のアイビーホール青学会館で第33回如月会が開催されました。今回は47名の方にご案内、関西など遠方よりご参加3名を含め17名出席の会となりました。

次第に新型コロナの感染も収まってきた昨年の暮れに会員各位に会の再会を打診したところ、たくさんの方の賛同を頂いての開催です。長い間コロナウィルス感染拡大の影響で開催中止を余儀なくされてきただけに開催1週間前までは25名もの参加希望者で“本真か否か”嬉しい悲鳴をあげたほどでしたが、体調不良や突然の不都合が重なり参加者は減少したとはいえ、定刻前から三々五々談笑の輪が広がる楽しい集いとなりました。

会は、全体撮影⇒世話人代表 村澤醇治さんの開催の挨拶⇒S40年入社 永田堅志郎さんによる乾杯の音頭でスタート。歓談⇒山口県岩国市から参加の勝井嗣雄さん、大阪から参加の谷祥太郎さん、京都から参加の賀川和彦さん 遠路はるばる参加の皆様からの近況報告⇒歓談⇒久しぶりに参加していただいた小林正典さんの近況報告⇒歓談⇒欠席者の近況報告・幹事より事務連絡等を経て、あっという間に中締めの日となり、例年通りS46年組を代表して金井湧二さんの発声で気持ちを込めての一本締めとなりました。⇒最後に今回の最長老でもあり会の発起人でもある名島憲一郎さんによる総括挨拶を最後にお開きとなりました。

例年にも増してワイワイ・ガヤガヤ ああでもない・こうでもないとお互いの旧交を温めあい、来年の再会を約して14:00無事終了しました。

さて、2024年は、下記スケジュール通り、同じ季節、同じ会場で開催予定です。

ニチメン経理本部に係るOB・OGの皆様、また来年も元気にお会いいたしましょう！！

第34回如月会開催スケジュール(予定)

日時：2024年6月29日(土) 12:00～14:00 (開場：11時30分)

場所：アイビーホール青学会館 1F：FILIA

住所：東京都渋谷区渋谷4-4-25

電話：03-3409-8181



よ”等等。途中、体の不具合で参加出来なかった、大曾根誠君より携帯電話あり、皆と電話交流。又、当日自身が演奏者として参加する大事な演奏会の為参加出来なかった、蛭田恒美君よりSMSメッセージ、皆に読み上げた。今回の副産物、今まで4、5人でやってたグループLINEを一気に14人に、名前もnm48とした。

宴会の後は、同じビルのカラオケに全員で、先ず写真撮影の後、恒例の各自の近況報告、それから昭和の歌等絶唱。私を含む3名は延長、結局ホテルに帰ったのは夜9時過ぎで朝までバタンキュー。

翌朝9時に全員でホテルチェックアウト。別れ際に次はまた5年後にと言ったら即刻却下、3年後になった。真っ直ぐ帰宅した者もいるが、何人かは、“バスで小田原町巡り”“二宮尊徳記念館”“小田原城、日本文学館”“小田原魚市場”等に行った。

本当に楽しい時間だった。皆も今年の“Best Days of the Year”に挙げてくれるだろう。

NM48について、入社は東名阪入れて53名、東京配属は35名。46年のニクソンショックで47年採用の我ら年次は大幅に減った。因みに46年入社は124名、47年は100名で計4倍！当時は今と違って年功序列の習わし強く“出る釘”で打たれる様な事も有ったかな。でも80年代末の日経株平均が頂点を極めた日本経済の急成長期の先兵として大きな役割を担ったと自負して良いだろう。同期会最初にやったのは確か入社2年目頃、日本場所の料理屋の2階で20名以上でやった。その後20代は殆どやらず、多分30代も。40代は年に数回、50代はもう少し多く、60代から今に至るまでほぼ毎年。大体年明け。

“人は何で長生きしたいと思うんだべ”“そりゃ人それぞれ千差万別、ひとそれぞれだろうよ”

“毎日を元気で楽しく、時には周りも巻き込んで感動を求めて、かな”そんな中、NM48は我らにとって大きな“生きる”モチベーションのひとつになってるかなあ。いつまでも、とは言えないけど最後の二人になるまで100歳に挑戦しよう、っと。

出席者（リアルは、あいうえお順、敬称略）

リアル：大西明、小川博章、蒲澤信男、鯨岡繁、佐藤直文、佐藤道政、槇石博、松田哲、林康広、藤本博史、渡辺耕一郎

リモート：スマホ 大曾根誠
SMS 蛭田恒美

天国：平床幸次(15年没)、須佐美繁夫(20年没) 松園久勝(20年没) 手計讓治(23年没)



「俳句の会」いろは句会

佐 藤 英 二

長寿の「いろは句会」句集を今回もお届けします。当句会は本年9月には第406回を開催いたしました。

本年8月の句会はコロナ禍の間には控えていた対面句会を3年半ぶりに開催し、雑談を交わしながら活発な意見交換が出来ました。ネット句会では味わえない会員同士の繋がりを感じた次第です。8月度句会の集合写真及び顔写真公開のご了解のあった会員の写真を添付します。

今回も各会員の自薦句（本年4月～本年9月）3句をお届けします。（氏名は50音順）新たにお二人のメンバーが加わりました。

北国の今宵は白夜酔い覚めず
みやこ人コンチキチンと鱧にわく
母想ひ流す灯籠波に消ゆ

東 陽蔵

へたり込む球児が探す夏の風
苦うるか好みし祖父の年になり
稲刈り機操る女の男振り

上房 康成

恙なき老いのひと日や皐月晴れ
ひと口のお神酒効きたる山開き
音もなく雲引く機影秋高し

宇治田薫風

風を呼ぶ江戸風鈴の百個かな
表札の文字見え隠れ木槿花
秋茄子に心の艶を貰ひけり

久保田悦子

学び舎の桜は散れど夢よ咲け
雨上がり紫陽花映る石だたみ
百年の時忘れまじ秋の揺れ

佐藤 英二

日だまりの土のぬくもり草青む
葉桜の淡きかげりの段葛
日の匂ひ残る日傘をたたみおり

下川 泰子

風鈴の音にとけ込む夜風かな
虫の声止めば闇夜の深まりぬ
秋高し背筋をすっと立て直し

福島 有恒

薫風や百閒廊下清められ
白塗りのピエロは静止夏の風
宿坊へ誘ふやうに濃紫陽花

藤野 徳子



いろは句会（宇治田代表）



句会メンバー（左より下川・福島・藤野・佐藤）



徳永俊彦さんを偲んで

矢 嶋 正 孝

旧ニチメン大阪自動車部は、コロナ惨禍で中止していた毎年12月の忘年会を今年は4年振りに開催を決定、梅田の『河久』を予約しました。しかしながら、現在参加メンバーの中で最年長であり、部の業績に最も貢献されたレジェンドである徳永俊彦さんの訃報に接し、大変残念でなりません(6月6日逝去、享年84歳)。この訃報を、徳永さんをよくご存知の皆さんに送信したところ、海外の取引先を含め、数多くの皆さんから弔慰のメッセージが届き、それらを纏め、英文は和文の説明を付加し、徳永さんの奥さまにお届けしました。

筆者は(矢嶋正孝、1975年入社)、新入社員の研修期間に大阪機械総務部で繊維機械の輸出業務を担当、3年後に営業部である「大阪輸送機械部・第2課」に異動となり、その時の直属の上司が徳永さんでした。当時の徳永さんは、ギョロツとした大きな目、天然パーマのボサボサの髪型、大股で肩を揺らし山歩きのような歩行、話し方もボソッとユックリした口調で、これらの風貌からは「世界を駆け巡る商社マン」と云う雰囲気は全く無く、それから20年後、徳永さんは役員として輸送機械の本部長に就任されましたが、風貌は相変わらずの徳永さんでした。その徳永さんの、会社の業績に貢献された数多い武勇伝や、公私に亘るズッコケ話の一部を、在りし日の徳永さんを偲んで本会報に寄稿させていただきます。

徳永さんは、昭和37年(1962年)大阪大学・経済学部を卒業し日綿實業に入社されました。阪大4回生の就活時に「先に内定していた三井物産を断って日綿に就職したので、物産に推薦状を書いた教授に叱られた」との事です。当時の日綿は物産と業

界3位を競っていたとは言え、それから13年後に日綿に入社した筆者には当時の就活状況がよく分からず、物産を断った理由を聞いてみました。すると徳永さんの返答は「物産の内定者説明会の日と、阪大山岳部のメンバーでスキーに行く日が重なり、大学時代最後のスキーを優先した」との事です。この様な説明を聞いても、筆者の様な凡人には理解が困難な理由、優先の順位でした。

大阪自動車部の主要取引先はダイハツさんですが、このダイハツ工業は明治時代に大阪高等工業学校(後の大阪大学・工学部)の内燃機関研究陣が起案した「産学協同の発動機製造会社」であり、産業革命後の大阪で「公的機関が起業に協力し、世界に通じる産業を！」というのは、日本綿花の創設と同じ歴史観があります。徳永さんがそれを意識されてダイハツ案件を担当されたわけではありませんが、当部と阪大とダイハツさんの「ご縁」は徳永さんから始まり、1980年代後半には当部所属の阪大出身者が合計8名にも。

ところで、筆者が自動車部へ配属された当時は、石油ショックから5年が経過し世界の経済が活況を呈し、日本車の生産・販売台数が飛躍的に伸びた時代でした。また、当時の大阪自動車部の取扱いは40ヶ国近くあり超多忙な毎日でしたので、通常の勤務時間帯に徳永さんや先輩課員より業務の話聞く時間は無く、残業が終わった8時以降の飲み会で教えて貰う毎日でした。そして、徳永さんより直接依頼された初仕事は「今から、三和銀行の淀屋橋店に行って、この預金通帳から現金8百万円を

引出し、近くの三菱信託銀行へ届けて欲しい」と、個人の通帳・印鑑・委任状を渡され、直ぐには理解できない依頼事項でした。これは、徳永さんがその日の昼に、ご自宅の新築用代金の一部を支払われる予定でしたが、急に、ダイハツさんより海外顧客との会議の要請があり、そちらを優先され、筆者に8百万円支払いの代行を依頼されたようです。「自分なら、他人の、新入社員を信用し、こんな事を頼めるかな?」「就活時の優先順位も理解困難」等々考えながら、8百万円の札束を入れたカバンを抱えて、御堂筋を早足で歩いていた初仕事を思い出します。

徳永さんの仕事のやり方を背中から見ているだけでも、大変驚いた事や勉強になる事例が多くありました。「この方針が正しい」と決められた際は、その実現には最も効果のある手段を選択されます。例えば、同じニチメン社内の海外支店との間にモメ事が発生、支店の立場を優先する海外支店長に対して、当時はまだ係長であった徳永さんが、何と、社長名を使い海外支店長にテレックスを出電された事がありました(当時のテレックス通信は、全文がローマ字、入出電は部課のアドレスから、文面の最後に出電者の名前を記載)。当時の上司である課長(田中務さん)と部長(三好武彦さん)が出電前にその原稿を見てビックリされ、「徳さん、UYEDAと云う大社長の名前で出電して、もし支店長が社長に直接確認を取ったらどうするん?」と、大変心配そうな表情で聞かれました。ところが徳永さんは「ご心配なく、この支店長にはそんな度胸はありません。例え社長にバレたとしても、ニチメン全体では当部の方針が正しいので問題無いです」と、平然とした返答で、それを停止できないお二人は、部長・課長からの「降格人事」も覚悟されたと思います。しかし、そのテレックスが出電された後すぐに海外支店長から返信あ

り「日本側の方針を全て了解しました。すぐに現地側でもフォローします。」との返答でしたので、お二人は顔を見合わせ、ホッとされていました。

筆者が自動車第二課に移って1年間 徳永さんの仕事の進め方を背中から見ていて「この上司の真似は到底無理」と判断しました。一方その頃、課長以下の社員による「社長への業績報告会」と云う特別企画があり、全社的にも第二課(コード1554)の業績が目立って好調であった為、社長への報告者の一人に、徳永さんが選抜されました。「徳永さんは、どの武勇伝を、社長の前で発表されるのか」と、楽しみにしていたところ『海外事業の急拡大に伴い、“キャッシュフローと、金利と、為替の管理”による、安定的な利益の確保』という、徳永さんらしくない、財務部が説明するような堅い内容でしたが、意外にも社長からは大変評価されたとの事です。実は、これは筆者が月例の部会で説明した資料(データ・数式・グラフ)を、徳永さんがそのまま使用して社長へ説明されたもので、これからも、徳永さんからの指示が無くても、このような側面的な業務で徳永さんのワークをフォローして行く事が「部下としての役割」と理解しました。

その他、徳永さんによる、一般のサラリーマンとか 商社マンでは考えられないエピソードが多々あり、それらの一部を『裕次郎さんとニチメン』と云うタイトルで、2021年の社友会会報に寄稿しました。また、筆者は2002年10月豊田通商とのミニM&Aで当時の所属部員20名と豊通へ転籍となりましたが、豊通でもニチメン時代の上司である徳永さんの数々の武勇伝やエピソードを披露すると、大いにウケました。

今年の『大阪自動車部隊忘年会』では、メンバー皆さんと在りし日の徳永さんを偲びたいと思っています。

また、東京自動車部の皆さんも、東阪自動車部の交流や情報共有に貢献され、人情味溢れる徳永さんの事を懐かしく偲ばれているようです。なお、この会報に10年前の「2013年度大阪自動車部隊忘年会」の写真を掲載していますが、このメンバーからは7名の方々（野村さん、若住さん、高橋さん、森さん、井上さん、浦西さんそして徳永さん）が物故者です。



ニチメン大阪自動車部隊 2013年 忘年会

2013年12月7日 @ 梅田駅前第3ビル 33階 『河久』 Photo-① 全体集合写真





4列:	角田和雄	浦西克義	藤間真理子	田中実	北野廣道	林明	三宅通方	青木裕子	渡辺篤	山田裕司	梶田祐子
3列:	藤間真樹 浦西朱実 藤沢由紀子										
2列:	吉村敦彦	酒井邦子	宮西信一郎	大槻健	美川広則	花輪颯弥	石川裕樹	井上拓	辻本明		
1列:	若住昇	矢嶋正孝	藤田康弘	徳永俊彦	野村喜久雄	森正子	高橋悦夫				



訃 報

(2023年5月～2023年10月判明分になります)

ニチメン東京社友会

※非会員

	氏 名	出身部門	ご逝去年月日	享年
1	大 崎 隆 三	鉄鋼貿易	2022年 4月27日	87歳
2	上 条 達 雄	機 械	2022年 5月23日	93歳
3	山 田 寛 治	プラント	2023年 1月 8日	87歳
4	宮 田 信 雄	不 明	2023年 1月10日	96歳
5	小 林 齊之介	非 鉄	2023年 4月 5日	91歳
6	洪 谷 義	食 糧	2023年 5月16日	88歳
7	※富 永 雅 敏	食 糧	2023年 5月26日	69歳
8	廣 内 卓 生	原 動 機	2023年 5月 1日	74歳
9	芦 村 八 郎	元取締役	2023年 7月 5日	83歳
10	西 村 弘	非 鉄	2023年 7月12日	90歳
11	内 海 和 男	経 理	2023年 7月24日	85歳
12	糸 井 康 雄	機械・建設	2023年 9月 1日	90歳
13	※山 内 伸 介	合 樹	2023年 9月 4日	73歳
14	大 場 禎 治	経 理	2023年 9月20日	88歳
15	倉 持 次 雄	食 糧	2023年 9月30日	86歳

ニチメン大阪社友会

※非会員

	氏 名	出身部門	ご逝去年月日	享年
1	仲 谷 泰 郎	内地繊維	2022年12月25日	93歳
2	上 田 良 三	木 材	2023年 4月18日	90歳
3	徳 永 俊 彦	元 役 員	2023年 6月 6日	84歳
4	西 原 良 子	繊維資材	2022年12月28日	72歳
5	小 泉 主 計	内販機械	2023年 5月 8日	93歳
6	牟 禮 忠 司	機 械 部	2023年 8月22日	94歳
7	小 塚 孝	綿糸布部	2023年 1月30日	93歳
8	杉 本 勉	内地繊維	2023年 7月20日	92歳

ご冥福を、お祈りいたします。合掌

【編集後記】

世界的な新型コロナ感染流行の為、長い間開催を中止していた社友会総会が、2019年以来4年ぶりの2023年7月13日に開催でき、会員の皆様には久しぶりに旧交を温められたことと思います、世話人一同、恙なく社友会総会を開催出来たことを大変喜んでおります。さて今号も多くのご寄稿をいただき、誠にありがとうございました、お陰様で大変充実した立派な会報を発行することが出来ました。

一方、世の中はロシアのウクライナに対する侵攻、北朝鮮のミサイルによる核の脅威、イスラエルのパレスチナガザ地区への戦闘等、世界の分断危機が数多く起こっています。日本国内に目を向けてみましても、円安、物価高、エネルギー不安、長期金利の上昇と気が休まらない事態が日々が続いております。上記のような情勢ではございますが、会員の皆様におかれましては、健康で安心できる日々が早々に来るよう祈っております。

●お知らせ：前34号記事(13ページ最下段の編集部追記)の高木恒久様のご逝去年月日の記載に誤りがございましたので、以下の如く訂正させていただきます。大変失礼いたしました。

正：「2022年11月27日」 誤：「2022年11月11日」

(中田 龍彦)

ニチメン東京社友会

〒100-8691 東京都千代田区内幸町2-1-1
飯野ビルディング8F

会報発行人：石原 啓資

編集担当・広報チーム

リーダー：奥村 陸夫

メンバー：入江 隆史 中田 龍彦 森田 淑子

印刷所：有限会社 関内印刷